

### Ⅲ 北貝塚出土の骨角器

#### 1 骨角器の出土状況

北貝塚から出土した骨角器の出土状況で特筆されるのは、NSM-181層における骨角器（鯨骨製品）等の出土状況であった。第13図にこの状況を示したが、当初は人骨（左橈骨）・鯨骨（肋骨）・骨角器（鯨骨製品）が斜面の傾斜方向と同じ向きに並んで検出されたため記録し精査を続けたところ、これらに近接し連続した状態で銚頭が検出された。銚頭・人骨・骨角器（鯨骨製品）・鯨骨は同一の面に検出され配置にも規則性があることから、人為的に並べて置かれたものと想定された。

また、ヘラ状の骨角器と鹿角が並んだ状態で検出された例もあった（図版8・Pic31）。

更に、釣針などの中には全く壊れていない状態で出土するものもあり、貝塚の形成については単に不要な物や欠損品を廃棄するという行為の連続だけとは思われない状況も確認された。

これら以外には、特筆すべき出土状況を認めなかったが概して貝層には骨角器が少なく、魚骨層や獣骨層などにやや多い傾向が有るようである。

#### 2 骨角器の種別と形態について

ここで扱う資料は骨や角を素材とする製品のほかに、動物の骨格・歯牙・貝殻などの硬質な部分を素材とする製品の全てを対象としており、正式には骨角器・歯牙製品・貝製品などと区別すべきであるが、本書ではこれらを骨角器と総称している。また、人為的な加工痕のある素材についても骨角器と同様に扱った。

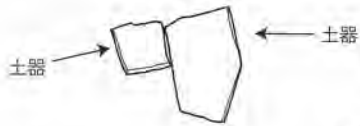
本書における骨角器の分類については一般的に行われている機能や用途を重視した大別を行った後に、形態や素材等に着目した細分を行っている。分類と本書の記載にあたり西本豊弘・熊谷常正両氏には遺物を実見していただいた上で細部にわたるご指導をいただいた上に、当方で同定できなかった資料の種同定をお願いした。

第IV期内容確認調査にて北貝塚から出土した骨角器は現時点では227点であり、この内、製品の全てと加工痕のある素材の一部の計184点を図示した。その内訳は銚頭5点・ヤス1点・釣針60点・ヘラ7点・リタッチャー8点・骨針10点・刺突具30点・髪針2点・櫛1点・耳飾り1点・垂飾品11点・腕輪2点・指輪状製品1点・札状製品1点・加工痕のある素材39点となる。これらの概要は次のとおりである。

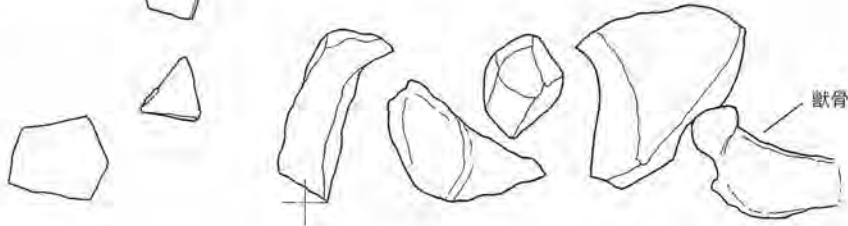
##### (1) 銚頭

銚とヤスはいずれも刺突や投擲によって魚類などの水棲動物を捕獲する漁具であるが、ここでは使用時に柄からの離脱するものを銚、柄に固定されたものをヤスとした。尚、部位名称等は第14図のとおりである。

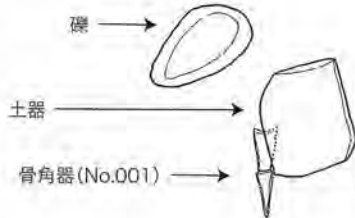
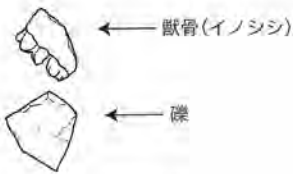
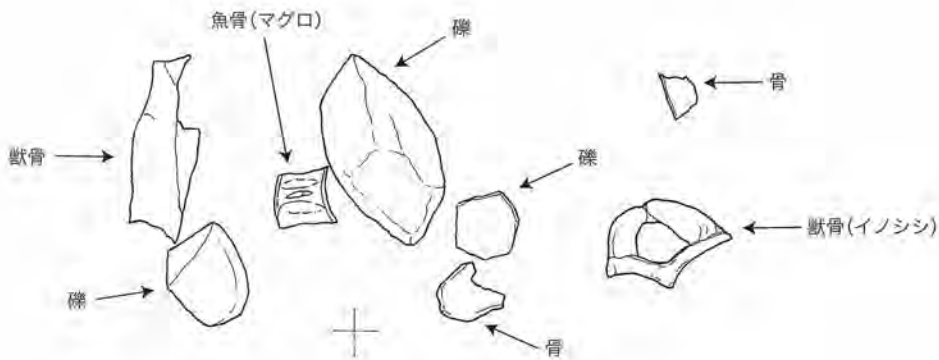
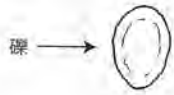
1～5は縄文前期の鹿角製開筒式銚頭であり、三角形の頭部と端部が二股に分かれた尾部（双距）の2部構造となる。頭部と尾部の境界にはくびれを有することで索綱（ロープ）を結ぶ足懸かりとなり、ここから尾部方向に向けて索綱を巻き付けることで柄溝と一体となった窩（ソケット）が作られ、使用時にはここに柄が差し込まれる。



No.4G



No.4G



貝(アワビ)

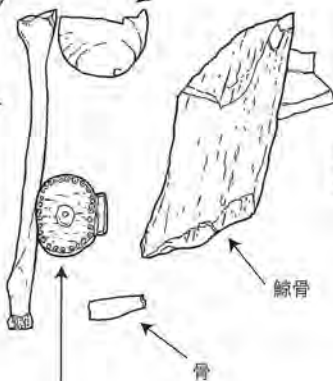
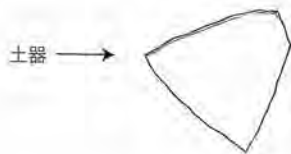
骨角器(No.001)

人骨

土器

土器

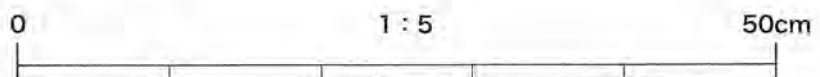
土器



鯨骨

骨

骨角器(No.145)

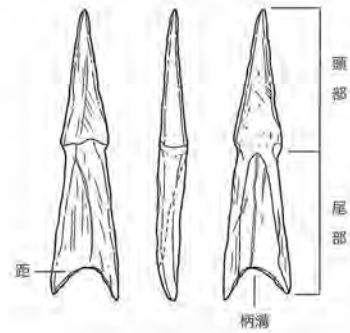


第13図 No. 5グリッドNSM-181層遺物出土状況

銛頭はいずれも鹿角の外表面を正面として使用し器面全体を丁寧に研磨しており、裏面の海綿体質部も除去されるが、001と004の頭部裏面にはわずかに海綿体質部が残存している。また尾部の裏面は三角形に抉られた柄溝を有し、奥壁付近の断面形は「V」字形を、尾端付近は「U」字形を呈しているが、おそらく柄の形状に関連するものと思われる。柄溝の加工は表面とは異なり粗い調整痕が認められる。

尚、005は焼成を受けて黒変している。

銛頭は5点ともに頭部や尾部形態及び柄溝の削り方と奥壁が概ね頭部と尾部の境界に設定される点など強い斉一性がある。但しその大きさには差異が認められ、対象物のサイズに合わせて作られたものと想定していたが、西本氏により当初001程度の大きさであったものが使用による欠損と再加工を繰り返した結果順次小さくなっていったものであろうとの指摘を受けた。



第14図 銛頭の部位名称

## (2)ヤス

006はシカの中手・中足骨を使用する縄文前期のヤスで裏面に骨の内面を残す。先端部のみが現存するもので、表面は粗く面取りされた状態であり、骨針や刺突具類に比べて粗い調整痕を有する。

## (3)釣針

今回の調査では60点もの釣針が出土しており、骨角器の主体をなしている。複数のタイプからなる単式釣針の他に組合せ式釣針の可能性のあるものを含むなどの多様性が認められる。

007～065は縄文前期から中期の鹿角製単式釣針であり、形態によって次の3類に分類される。尚、部位名称等は第13図のとおりである。

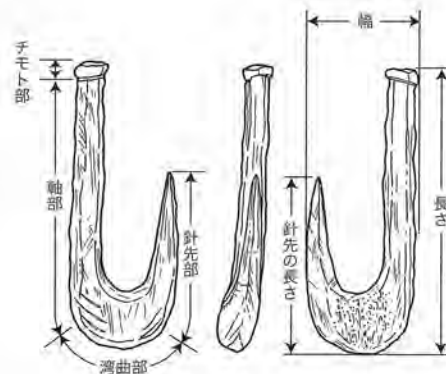
### 1類 (007～029・066)

形態が「し」字形を呈する最も普遍的な釣針で、中形から小形のものが多い。軸頂のチモト部は瘤状を呈するものが主体であるが、023のように刻み目を伴うものも見られる。チモト頂部には擦り切り痕や折り取り痕を有するものが多く、釣針を製作する際の最終工程の状況が窺われる。

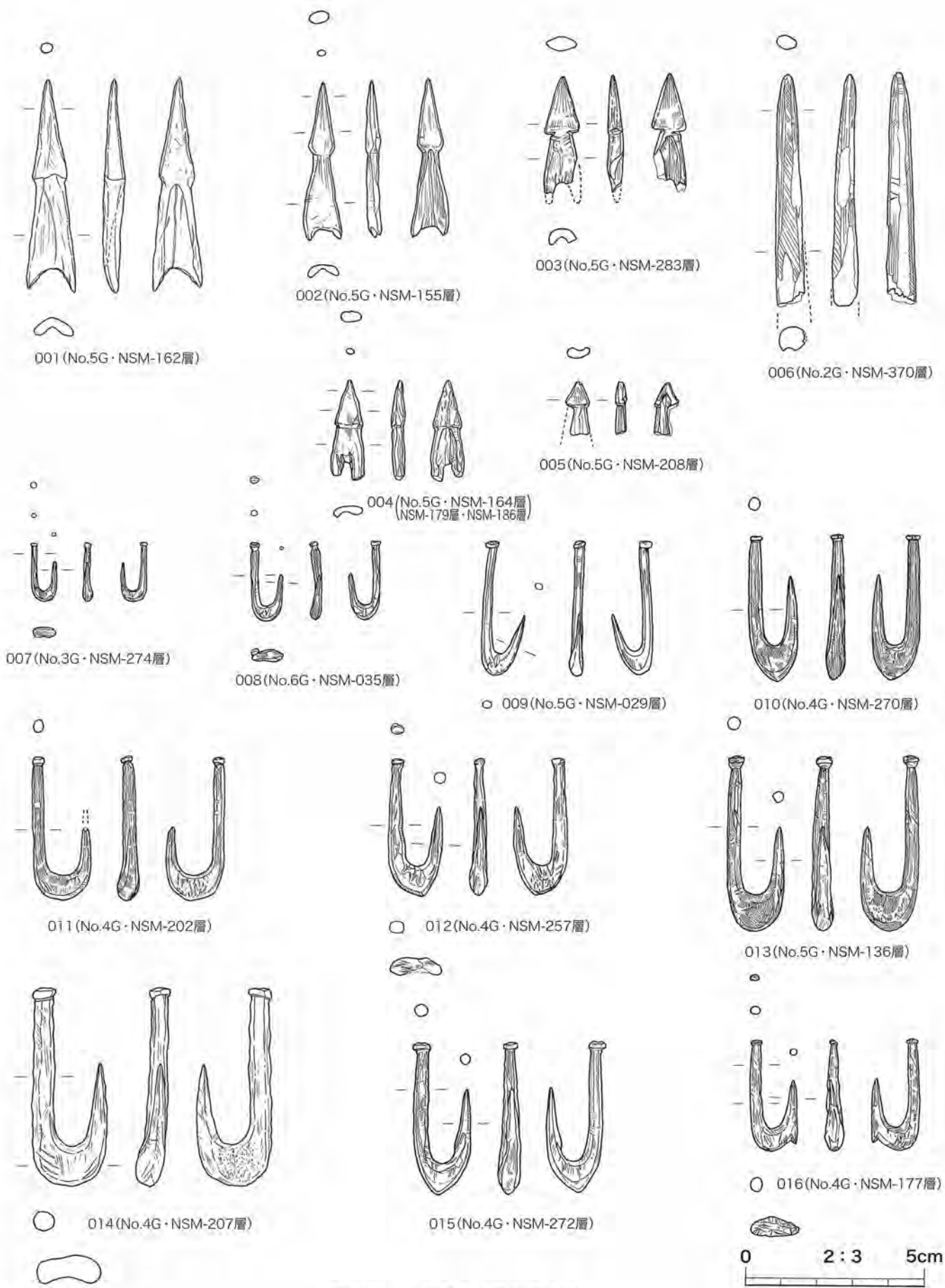
軸部は真直ぐなものを主体とし、やや内傾気味のもの(017・019)を含む。湾曲部は懐が狭く「U」字形を呈するものが多いが、下端が尖るもの(010・012・015)や、「V」字形を呈するもの(009)も見られる。

針先部は無畿を主体とし、内畿のもの(015)と外畿のもの(016)を含む。

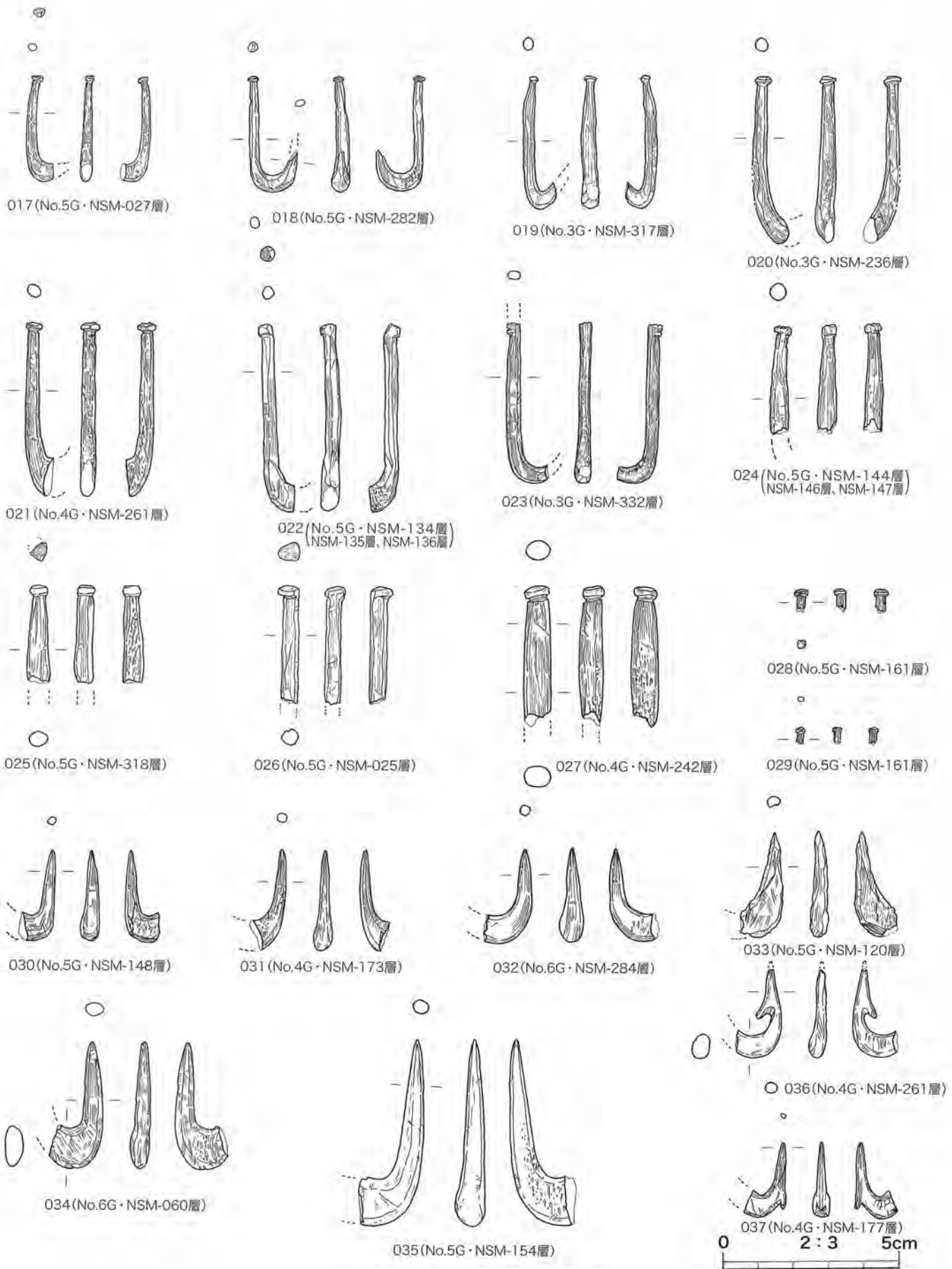
これらの釣針は鹿角の角叉部や角幹部を半裁して製作したものとみられ、湾曲部を中心として片面に海綿体質部が残存するものも多くみられる。また、チモト頂部と湾曲部下端に擦り切りや折



第15図 釣針の部位名称

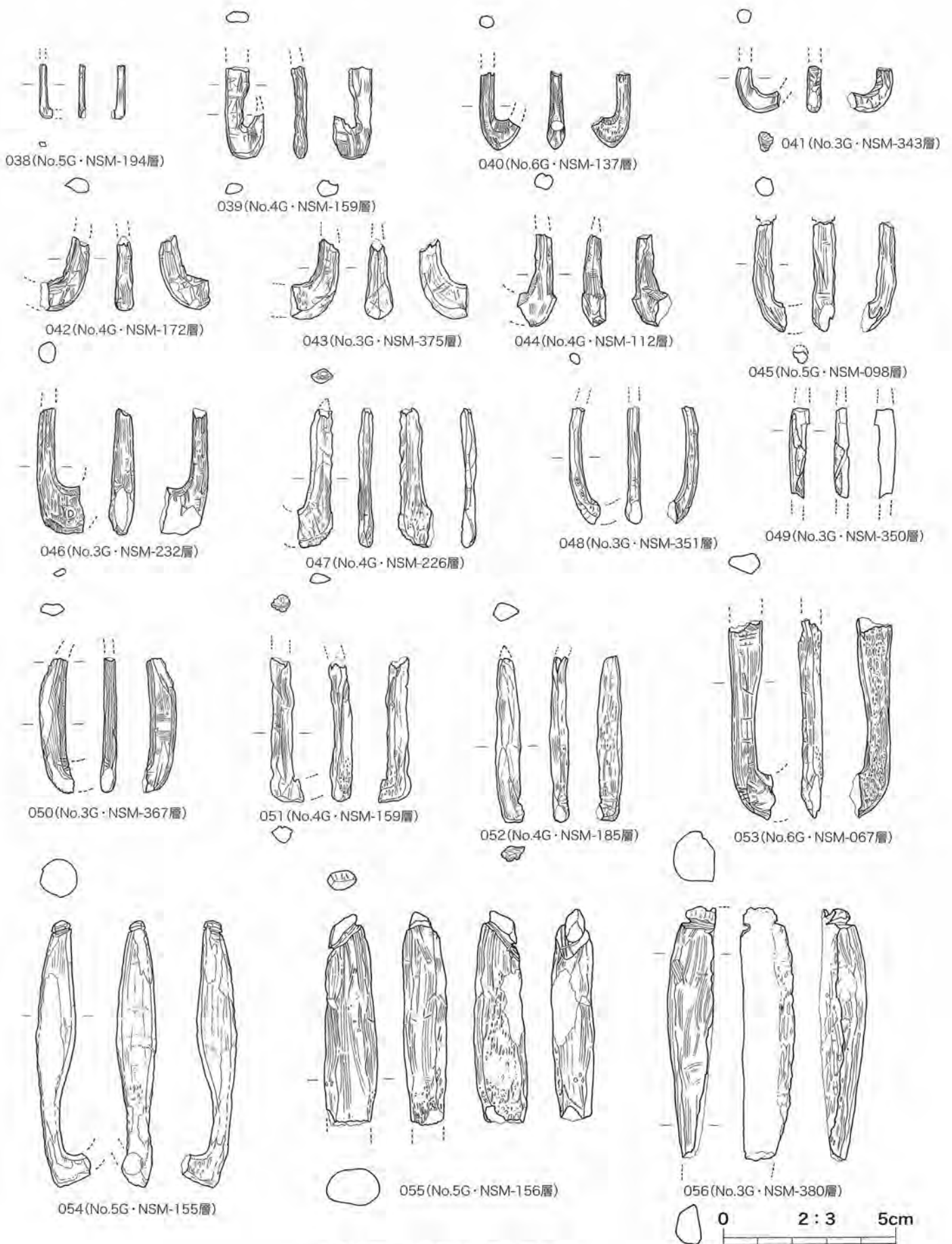


第16図 北貝塚出土骨角器(1)



第17図 北貝塚出土骨角器(2)





第18図 北貝塚出土骨角器(3)

り取りの痕跡を残すものも多い。

066は軸部と湾曲部の境界を擦り切った後に折り取ったもので、欠損品を加工して再利用を図ったものと思われる。

## 2類 (054～061)

軸部が特に太い大形の釣針で、製作技法により次のとおり細分される。

### 2 A類 (054～060)

本類の釣針はいずれも縄文前期に伴うもので、鹿角の角尖部を素材とし角尖側をチモト部、角幹側を湾曲部とするものを主体とする。他の単式釣針はいずれも鹿角を半裁し製作するが、本類のみは大半が鹿角を半裁せずにそのまま製作するもので、角尖端を擦り切って除去した上で沈線を巡らせてチモト部を作り、基部側を削りながら湾曲部と針先部を製作する。このため、軸部上半の断面形は円形を呈しており素材となった角尖部の形状を残し、軸部下半から湾曲部にかけては海綿体質部が大きく残存するという共通性がある。

但し、060は本類に共通する形態を有するもののチモト部を角幹側、湾曲部を角尖側としており、他との相違が認められる。また、055・056は欠損により素材の選定方法が確認できない。チモト部の形態は沈線を軸部に対して斜めに施すもの(054・055・059)と、軸部に直交して施すもの(056～058)の2種が認められる。

054～056は最大径が軸部中央付近にあるもので、054の軸部は紡錘形を呈することで小魚を連想させる形態となっている。

057・058も同様であるが最大径をチモト部付近に有する。057の軸部には斜め方向に黒色の付着物がかすかに観察されたためドットにて図示した。軸部に何かを巻き付けた際の接着剤の痕跡だと思われる。

湾曲部は「V」字形(054)と「U」字形(057・058)の2種が認められるが、いずれも針先部を欠く。

### 2 B類 (061)

1点のみであり形態的には2 A類の057・058に類似するが、角幹部の半裁したものを素材とすることで前者と区別される。061は縄文中期に伴う釣針で、沈線を横に巡らせたチモト部とほぼ真直ぐな軸部が現存し、湾曲部と針先部を欠く。正面は鹿角の表面に相当し軸部に螺旋形の凹凸が数段認められたため細線とドットにて図示した。やはり何かを巻き付けるための工夫と考えられる。

側面には擦り切り痕を残し、裏面には大きく海綿体質部が残存する。

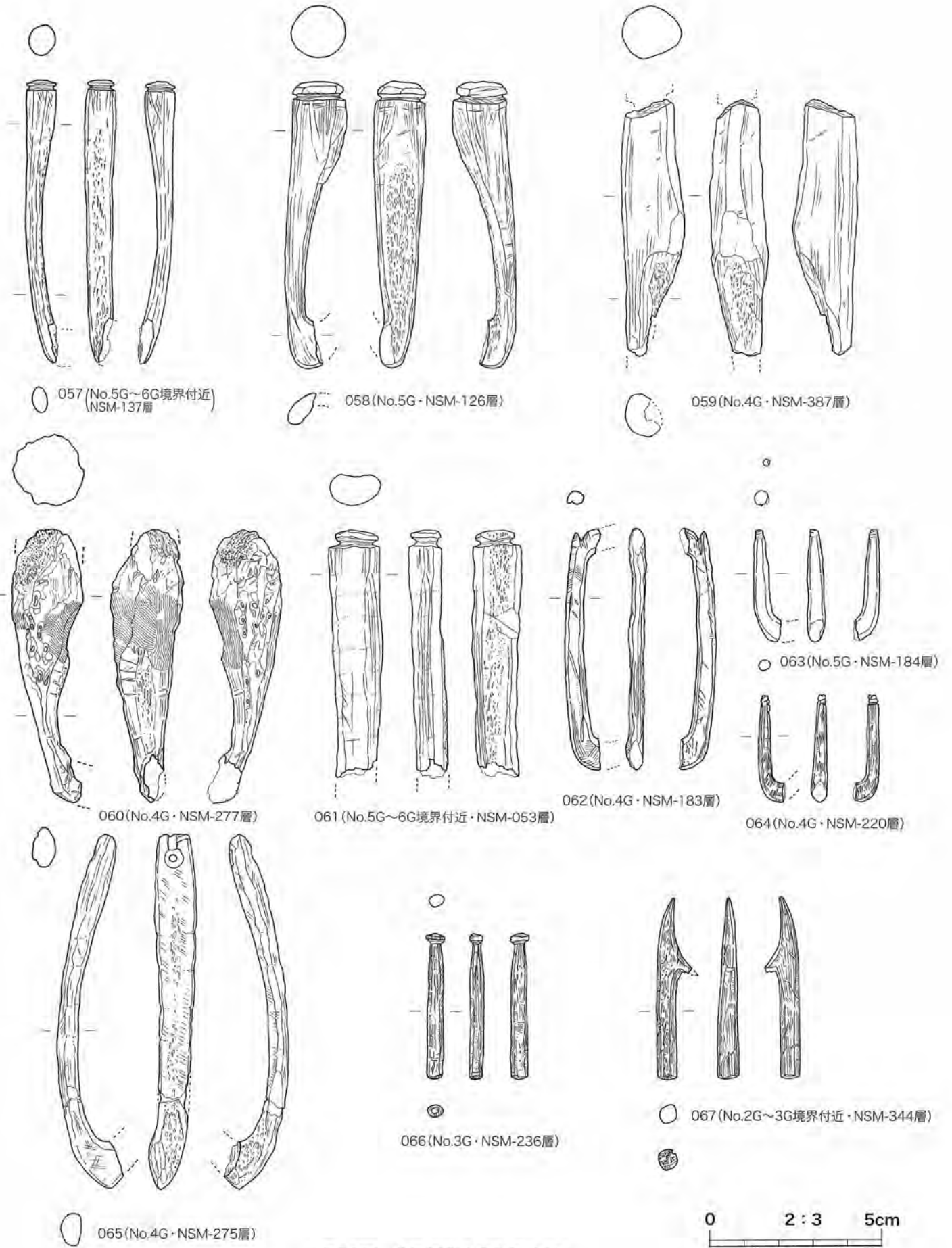
2類釣針は大形である点、軸部に何かを巻き付けたような痕跡を持つ釣針を含む点、小魚を模したと思われる形態のものを含む点から、魚食性の大型魚を対象とし軸部に鳥の羽根や魚皮などを巻き付けて使用する疑似針に相当するものだと思われる。また、出土層位により2 A類から2 B類への変遷が想定される。

## 3類 (062～065)

前述した以外の形態を有する釣針であり、それぞれが独自の形態を有するものではあるが数が少ないために一括した。

062はチモト部に縦方向の刻み目を有し、真直ぐな軸部の釣針である。チモトの頂部を欠くが刻み目よりさらに内湾しながら続くので、他にも縄を緊縛するための加工が存在する可能性もある。湾曲部は「U」字形を呈する。

063・064は1類に類似するが、チモト部の形態が異なるため分離した。064はチモト部に浅く



第19図 北貝塚出土骨角器(4)



細い沈線を横方向に2条巡らせ、頂部にもこれと直交する細い沈線を施す。軸部はチモト部から湾曲部にかけて次第に太くなり、湾曲部は「U」字形を呈する。063はやや磨滅しているがほぼ同様の形態を有する。これらは1類釣針の欠損品を再加工したものである可能性も有るが、2点とも形態やサイズに共通性が有るので目的性を持って作られた定型的なタイプとして捉えることも可能である。両者の可能性を指摘しておきたい。

065はチモト部に穿孔する大形の釣針である。通常チモト部への穿孔は両側面から行われることが多いが、本例は前後両方向から穿孔されている。軸部は細長く緩やかに内湾し、湾曲部は「V」字形を呈する。軸部には数段の凹凸が認められたため細線等で図示した。

この釣針も角尖部を素材としており、製作方法は2A類との共通性が認められる。

#### 4類 (067)

067は大形の針先部であり、基部に切り込みを入れ、折り取った後に研磨している。先端部は尖りながら内湾し、やや下にカエシが付く(内畿)。形態やサイズから単式釣針の針先部とは考えられず、組み合わせ式釣針の針先部である可能性が想定される。但し、今回はこの針先部を装着する軸部が出土していないため断定はできない。あるいは組み合わせ式ヤスなどの一部となる可能性もあるかもしれない。

#### 針先部・湾曲部 (030～053)

単式釣針の欠損品のうち1類～3類に伴うものと思われる針先部と湾曲部の破片を一括した。

針先部(030～037)は無畿を主体とし外畿と内畿をそれぞれ1点ずつ含む。035は針先長5.4cmを計る大形品である。033は未製品である。

湾曲部(038～053)は「U」字形・「V」字形を呈するものの他に046のように角張るものも認められる。039・047・050～052は未製品である。

### (4)ヘラ

先端部の形状がヘラ状となるものを一括した。次のとおり3類に細分される。

#### 1類 (068)

068はシカの左尺骨近位部付近を使用するヘラで、基部(近位部)は関節部をそのまま残し「握り」としている。機能部は使い込まれて丸みを帯び、使用時の剥離や擦痕が確認される。

#### 2類 (069～071・074)

獣骨を素材とするものである。

069はシカの中足骨を半裁したものを使用する典型的な骨筧である。機能部付近のみの破片であり、先端部の断面形は両刃形を呈し、良く使い込まれたため平滑で光沢がある。裏面には横方向の擦痕が顕著に見られ、ヘラ先を横方向に動かす使用方法が有ったことが想定される。

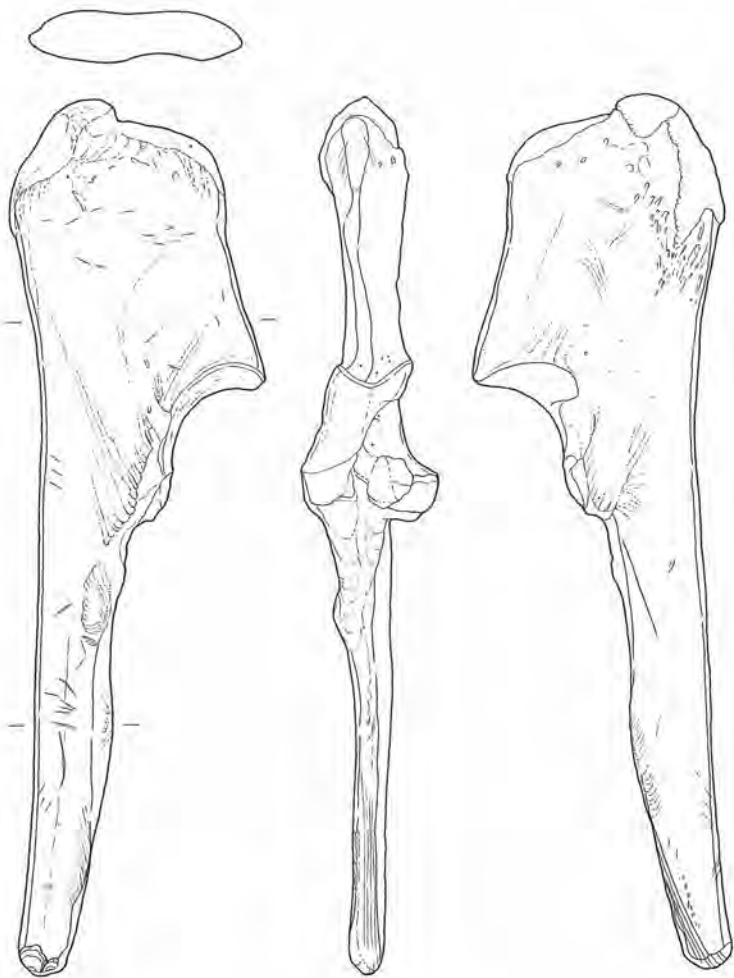
また、本製品は欠損面を含むほぼ全面に黒色の付着物が認められることから、欠損後にはピッチを塗る道具として再利用されたものと想定される。

070・071・074は獣骨製のヘラで、シカの中手・中足骨を素材としたものと思われる。070・071の機能部形態は069に類似するが、擦痕は縦方向のもののみが認められる。

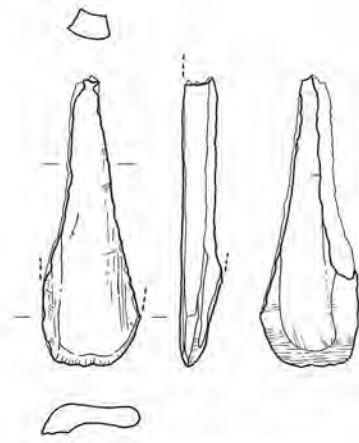
#### 3類 (083・084)

本類はこれまで知られていない器種であるが、素材や形態等に共通性があり目的性を持って作られた定型的な骨角器であると判断した。

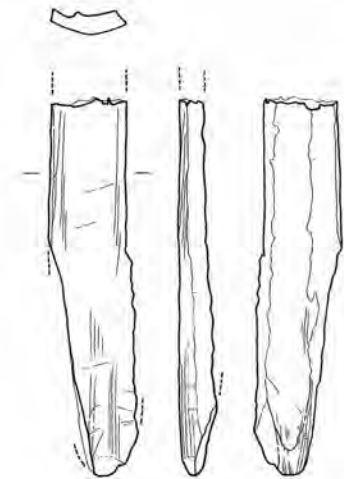
083・084は上下両端を裁断した鹿角を素材とし、大形の割には長さの短いヘラである。いずれ



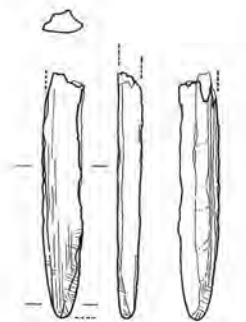
068(No.4G · NSM-279層)



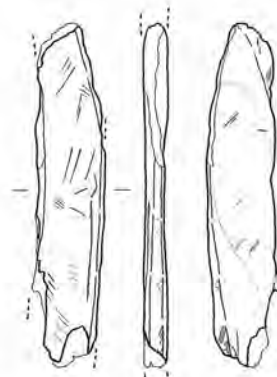
069(No.5G · NSM-023層)



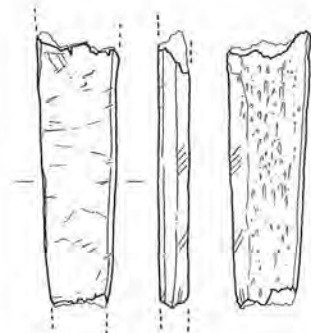
070(No.3G · NSM-298層)



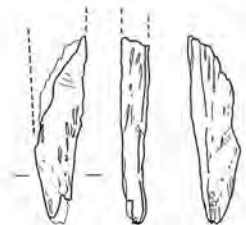
071(No.4G · NSM-110層)



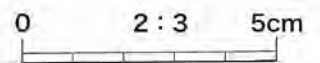
073(No.3G · NSM-370層)



074(No.3G · NSM-326層)



072(No.3G · NSM-326層)



第20図 北貝塚出土骨角器(5)

も基部には沈線を施し先端部付近はへら状に加工する。但し、先端部の断面形状は2類のように両刃形とはならず、厚みがあり面取りされた状態となっている。084は先端部付近に明瞭な使用痕は認められず、軟質なものを対象とした使用法が想定される。

083はリタッチャーへの転用が行われ、先端部の正面側に押圧剥離時の使用痕と、基部付近に集中する鼠歯状痕が確認される。

083・084はともに基部の形態や機能部付近の加工方法に2A類釣針との共通性が認められることから、元々は大型の釣針であったものを再利用した可能性も想定される。

## (5) リタッチャー

剥片石器を作る際に使用した剥離具を一括したもので、ソフト・ハンマーとして使用されたものを含む。次の2類に分類される。

### 1類 (075～078)

075～078はこれまで棒状加工品や棒状角器等と呼ばれてきたものであるが、戸井貝塚(西本ほか1993)の分類に従いリタッチャーとする。いずれも鹿角を擦り切って棒状としたものの先端部を使用する。先端部は面取りされた様な状態となり、粗い擦痕が集中しており、剥片石器を押圧剥離させた際の使用痕と想定される。先端部以外にはほとんど使用痕が認められない。

076は先端部の形態や擦痕の状況が類似するためここに含めたが、断面形が扁平であり角ペラの基部となる可能性もある。

### 2類 (079～082)

目的性を持って作られた定型的なものではなく、鹿角片や骨角器の欠損品を使用するものである。本来は本類の方が主体を成すものと想定される。

079は前述した2A類釣針の湾曲部と針先部を欠失した欠損品を再加工したものである。先端部は1類同様に面取りされたような状態となり、この周辺に粗い擦痕が認められる。

また、先端部と基部の2か所にダメージの集中する部分があり、特に先端部側が著しく潰れて元の器面より大分窪んでいる。このダメージはソフト・ハンマーとしての使用痕と考えられるが、部分的に鼠歯状痕らしき擦痕も認められるため剥片石器の刃部をリタッチした使用痕の可能性もある。

080～082は鹿角片を素材とするものである。080は落角(右側)の角座と第1枝の破片で、角幹部を粗割りし折り取っている。角尖部とその周辺に粗い擦痕があるほかに、角枝部のほぼ中央にダメージが集中し潰れている部分がある。081・082はいずれも角尖部の破片であり、先端部に使用痕がある。082は剥片石器の刃部をリタッチした際のものと思われる鼠歯状痕が明瞭に集中する部分が認められる。

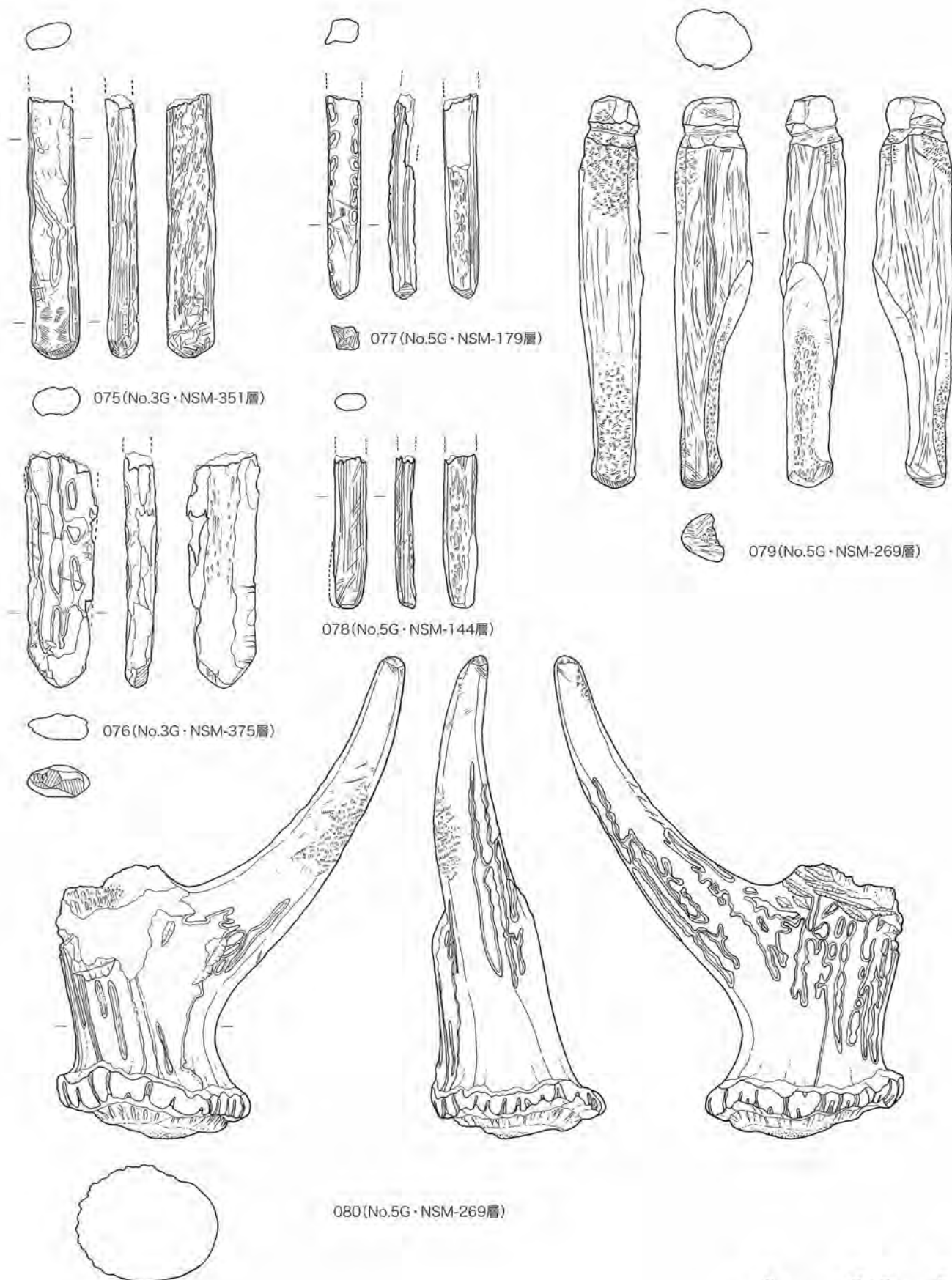
## (6) 骨針

縫針に類似する形態のものを一括した。次の2類に細分される。

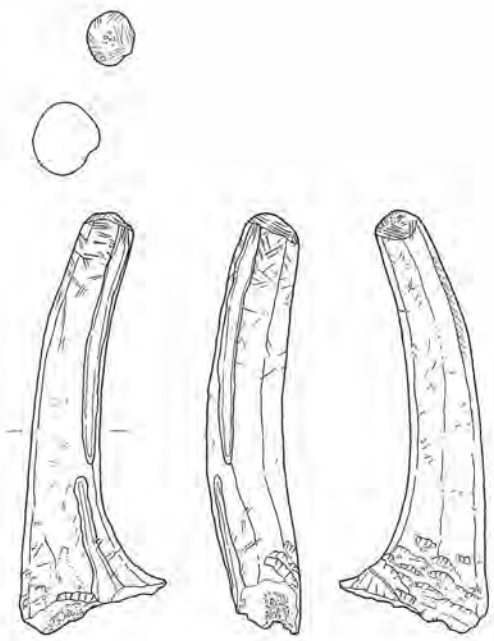
### 1類 (085・086・090～094)

一般に骨針や細型針などと呼ばれる小形のもので、シカの四肢骨などを素材とするものの加工が進んでおり部位を特定できない。

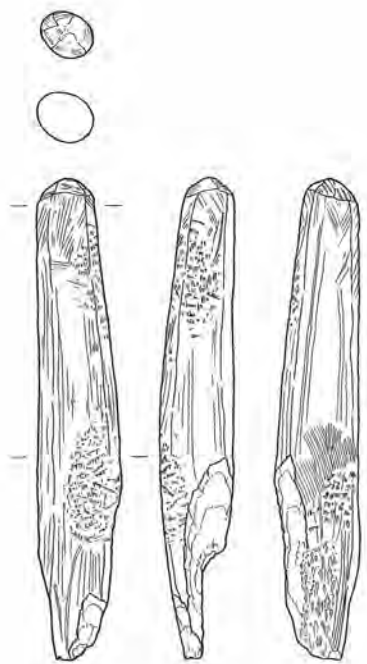
085・086は典型的な骨針である。小形であり基部に表裏両面からの回転による穿孔があり先端部は尖っている。特に086は使い込まれており、全面が光沢を帯びている。また、円孔周縁の磨滅は



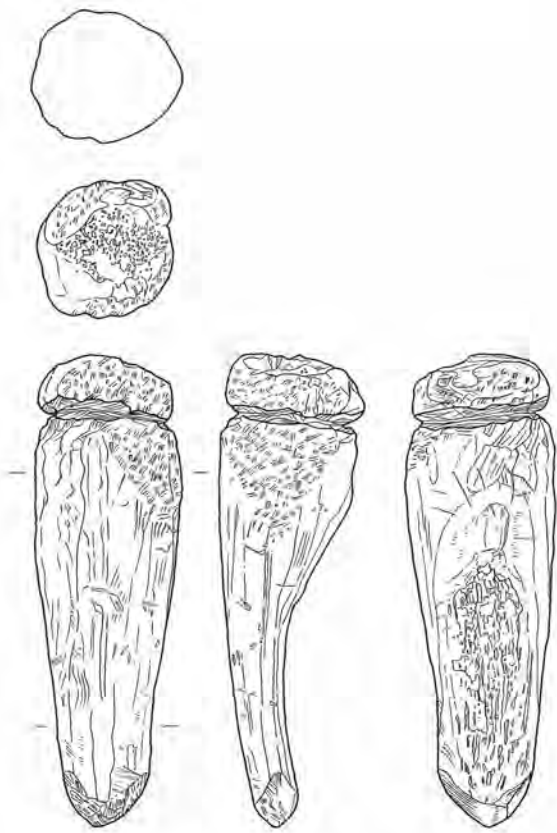
第21図 北貝塚出土骨角器(6)



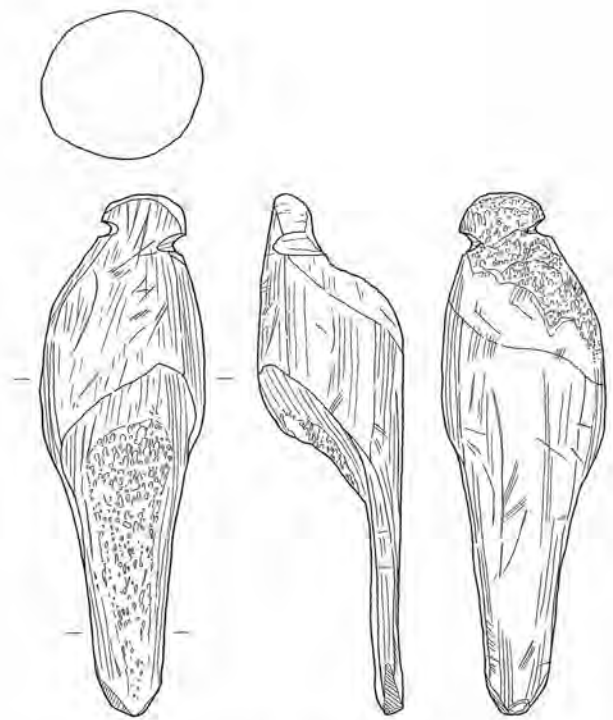
081 (No.4G・NSM-282層)



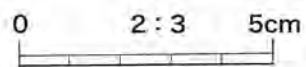
082 (No.5G・NSM-131層)



083 (No.5G~6G境界・NSM-151層)

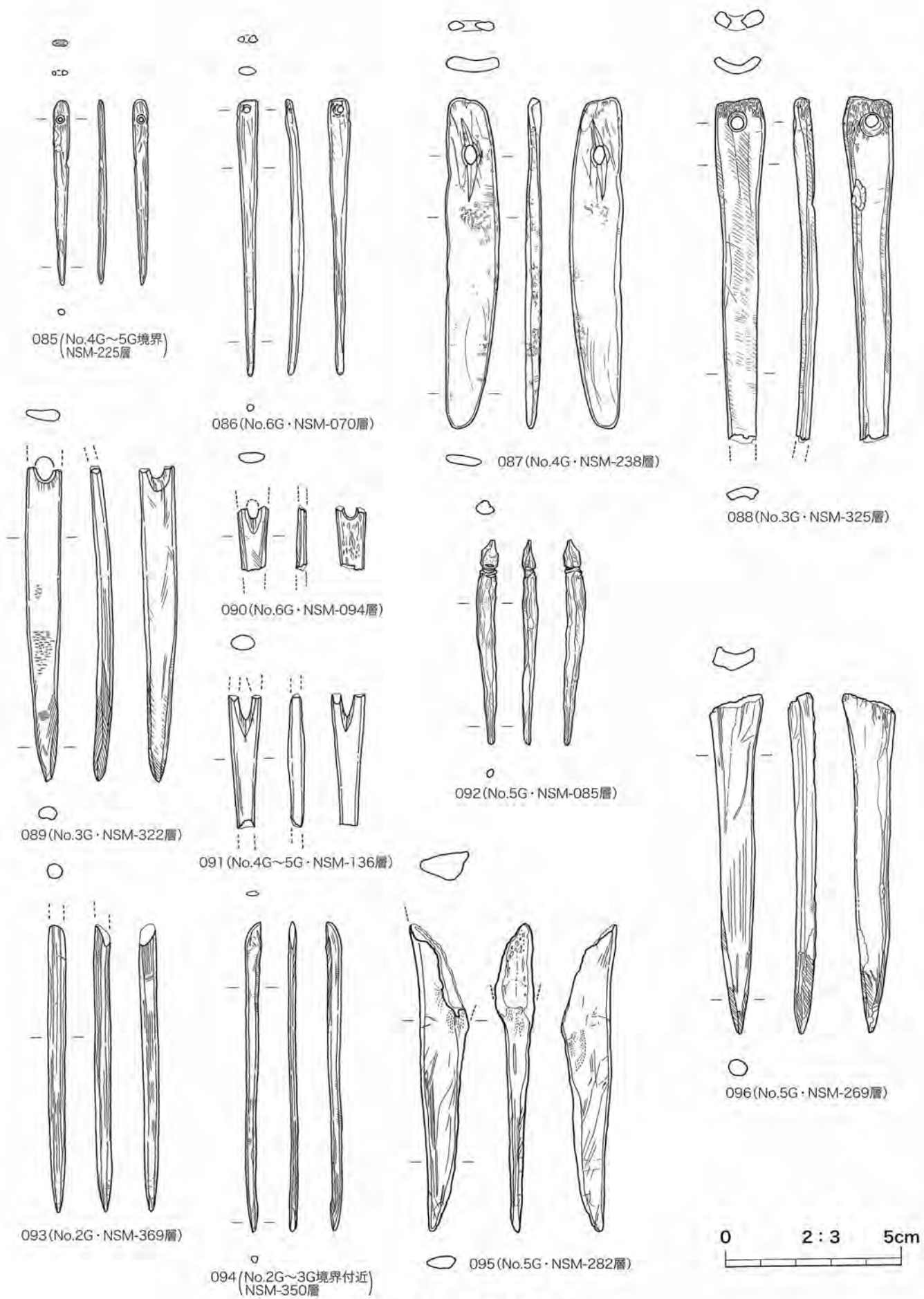


084 (No.4G・NSM-173層)



第22図 北貝塚出土骨角器(7)





第23図 北貝塚出土骨角器(8)

上端で著しく、糸を通して盛んに使われた使用痕として確認された。

092も小形であり円孔に変わり沈線を施すものである。先端部の形態は前述したものに類似する。また、この骨針は基部側も尖っており使用痕と思われる光沢が認められるため、先端部と基部の両側を使ったことが確認された。

094は著しく細い製品であり、基部に明瞭な糸かけを持たないが基部と先端部の両側に光沢が認められる。何らかの欠損品を針状に再加工した可能性が大きい。

090・091・093は欠損品である。091は縦方向の擦り切りにより楕円形の孔を穿つもので、090も同様かと思われる。093は先端部付近の破片である。

085・086・092・093の先端部の断面形は丸く、光沢を有している。明瞭な回転痕は確認されないが、布や皮革などの比較的柔らかい対象物にある程度の回転を加えながら使用した結果と想定される。

#### 2類 (087～089)

088はシカの中手・中足骨を4分割したものを使用している。基部付近は近位部に相当し、関節部の凹凸を削って平滑にし、上端に表裏両面からの回転により穿孔する。089は先端部側の破片で、先端部は5面に面取りされており回転方向の使用痕は認められない。

087は獣骨製で断面形はへら状を呈する。基部には表裏両面からの縦方向の擦り切りにより楕円形の孔を穿つ。全体的に光沢を帯びるが先端部で著しい。

2類についても1類同様に糸や紐を通して使う用途が想定されるが、使用痕の相違等により対象物が異なる可能性が大きいといえる。

### (7) 刺突具

先端部の尖った製品で前述したもの以外を一括した上で次の3類に分類した。

#### 1類 (095～100・121～124)

獣骨・鳥骨製の刺突具で先端部に回転痕を伴わないものである。

095はシカの右尺骨を使用するもので基部(近位部)を欠く。前述した068と同様な部位を使用するが、先端部が尖るため刺突具として分類した。先端部に縦方向の擦痕が確認される。また098もシカの左尺骨を使用する刺突具で基部と先端部の両側を欠く。

096はシカの右脛骨遠位部付近を使用する。基部には手擦れと思われる光沢があるためこのままの状態で作られた完形品であると思われる。先端部は089同様に面取りされている。

097はシカの中足骨を使用する。実測図正面は骨の内面側であり先端部は平滑でよく使い込まれている。

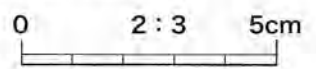
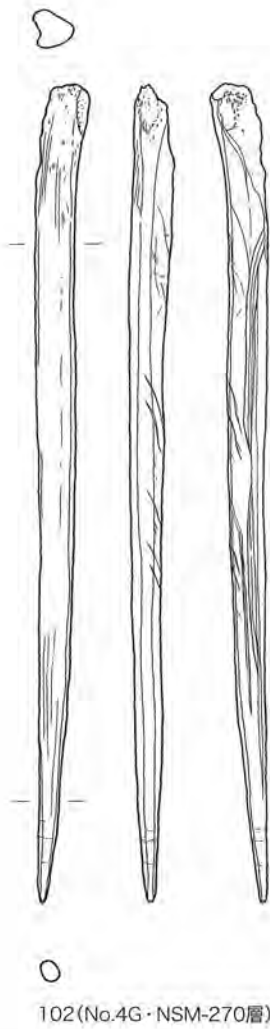
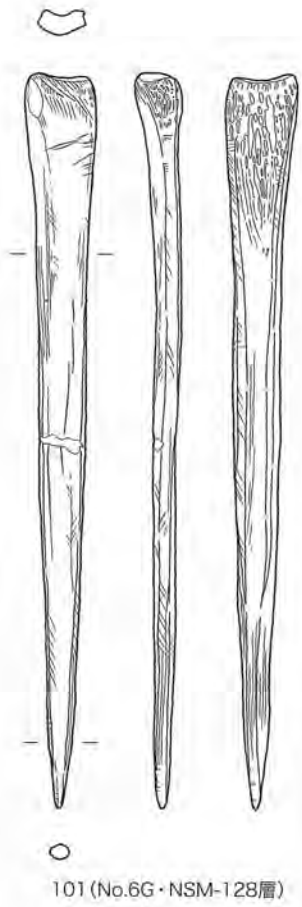
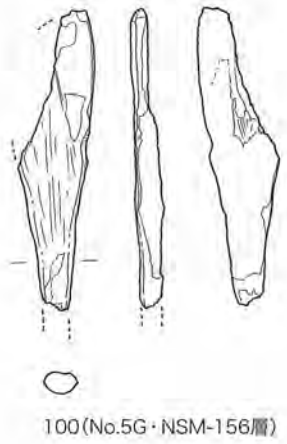
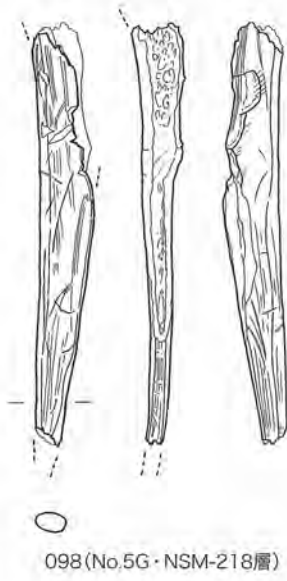
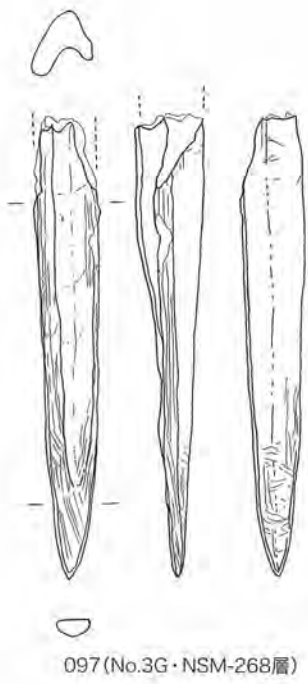
099・100は使用部位が不明の刺突具である。099の先端部は096同様に面取りされている。

121はクマの左腓骨を使用するもので近位部の関節部をそのまま基部とする。先端部は斜めに切り取って機能部としている。122～124は鳥骨片と思われる薄い骨を素材とし、先端部を尖らせたものである。いずれも欠損品であり全体の形状は不明である。122は全面的な調整痕があり、装飾品等の可能性もあるが、基部を欠くためここに分類した。

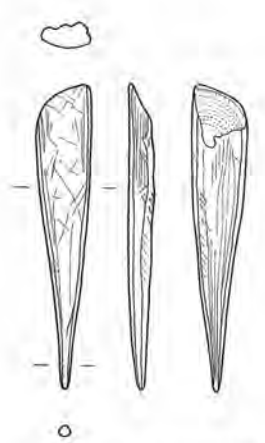
#### 2類 (101～117)

獣骨・魚骨を使用する刺突具で先端部に回転痕を伴うもの、又は回転を伴う使用が想定されるものである。

101・103はシカの中足骨を、102はシカの中手骨を素材とするもので、擦り切って4分割した



第24図 北貝塚出土骨角器 (9)



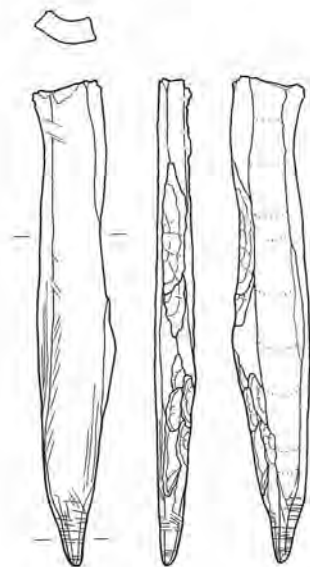
104 (No.4G・NSM-270層)



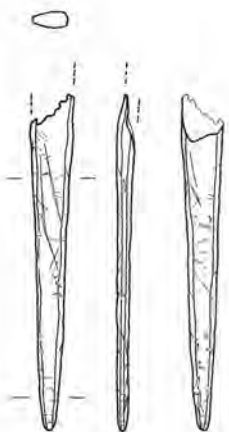
105 (No.2G・NSM-357層)



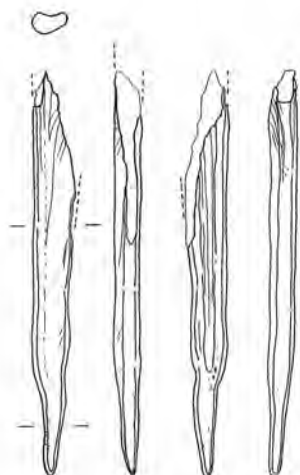
106 (No.6G・NSM-061層)



107 (No.4G・NSM-297層)



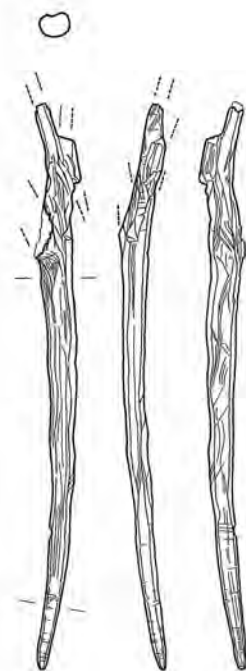
108 (No.3G・NSM-241層)



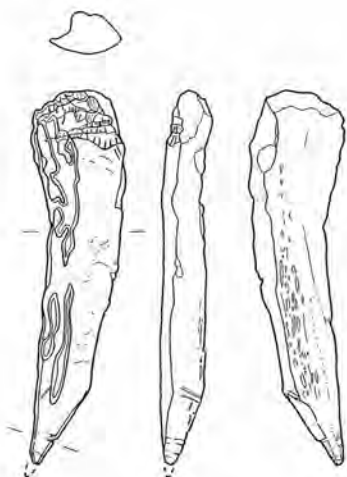
109 (No.4G・NSM-254層)



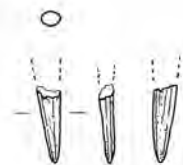
110 (No.5G・NSM-084層)



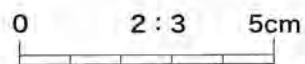
111 (No.4G・NSM-168層)



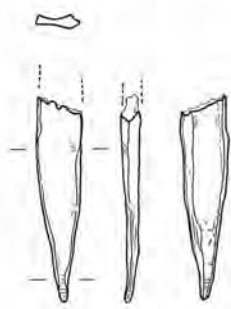
112 (No.5G・NSM-155層)



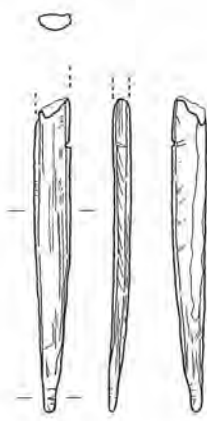
113 (No.4G・NSM-277層)



第25図 北貝塚出土骨角器 (10)



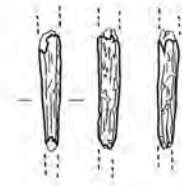
114 (No.6G・NSM-075層)



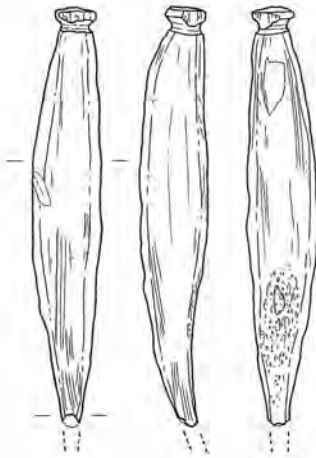
115 (No.3G・NSM-285層)



116 (No.5G・NSM-131層)



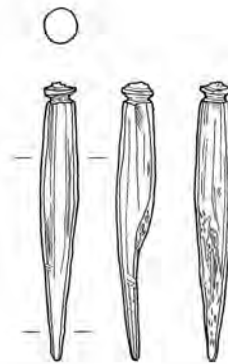
117 (No.2G・NSM-384層)



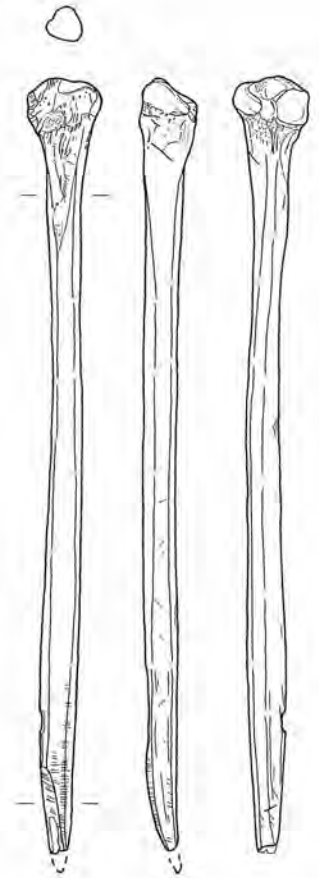
118 (No.4G・NSM-224層)



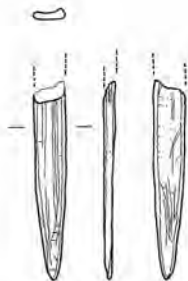
119 (No.4G・NSM-272層)



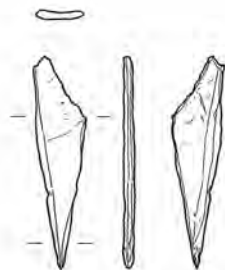
120 (No.4G・NSM-183層)



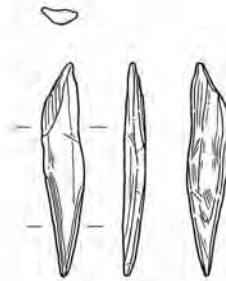
121 (No.5G・NSM-101層)



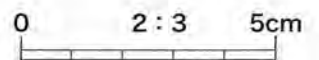
122 (No.3G・NSM-343層)



123 (No.4G~5G・NSM-107層)



124 (No.3G・NSM-315層  
NSM-316層・NSM-317層)



第26図 北貝塚出土骨角器(11)



骨の近位部側を使用している。基部や先端部以外の調整は粗雑で擦り切り痕や剥離痕を残す。先端部には回転による使用痕が認められ、よく使い込まれている。

105～107・109・110・113～115・117は獣骨片を素材とするが種名や部位等は不明である。105～107の基部には手擦れと思われる光沢があるのでこのままの状態で使用された完形品だと思われる。基部や側面等への加工痕は認められない。他のものは欠損品である。いずれもよく使い込まれており、回転を伴う使用痕がある部分（先端部）と使用痕のない部分（体部）の境界は107のように比較的明瞭なものが多い。

104・108は前述したものと異なり器面全体に調整痕を有する丁寧な作りの骨角器である。先端部から基部方向にかけて緩やかに移行するため先端部と体部の境界は不明瞭である。両者ともに装飾品等の別な器種の可能性もあるが、先端部の形状によりここに分類した。

111・112は鹿角を素材とする。112は基部に打割痕を有する鹿角で先端部に明瞭な回転痕がある。112は器面全体に調整痕を有し、基部にも装飾性のある加工が有るため本来は髪針（ヘアピン）などの装飾品として製作されたものの可能性が大きい。先端部は回転を伴う使用が想定されるものでありここに分類した。

116はマグロの棘を素材とするもので先端部に明瞭な回転痕を有する。

### 3類 (118～120)

基部に沈線を有するものを一括した。119は鯨骨を素材とするもので、幾分太めの基部に沈線を巡らせここから先端部にかけて緩やかに細くなる。先端部には回転痕が著しく、体部との境界も明瞭である。118・120は鹿角の角尖部を素材とするもので、形態的には119に類似するもので、120の使用痕も共通する。素材の選定法や加工法は前述した2A類釣針と同様である。また、118・120ともに体部に微量ではあるが黒色の付着物が認められる。このことから、118・120は2A類釣針の欠損品を再利用したものの可能性が大きい。但し、119は転用品とは考え難いため、本類は目的性をもって作られた定型的な器種と想定される。

## (8) 髪針 (ヘアピン)

125は獣骨製の髪針である。頭部は大略方形を呈し下端の体部との境界に細い沈線を施す。体部はほぼ同じ幅で、先端部は尖っているものの回転の痕跡は無い。全面的な調整が認められるが側面の一部に擦り切り痕を残す。

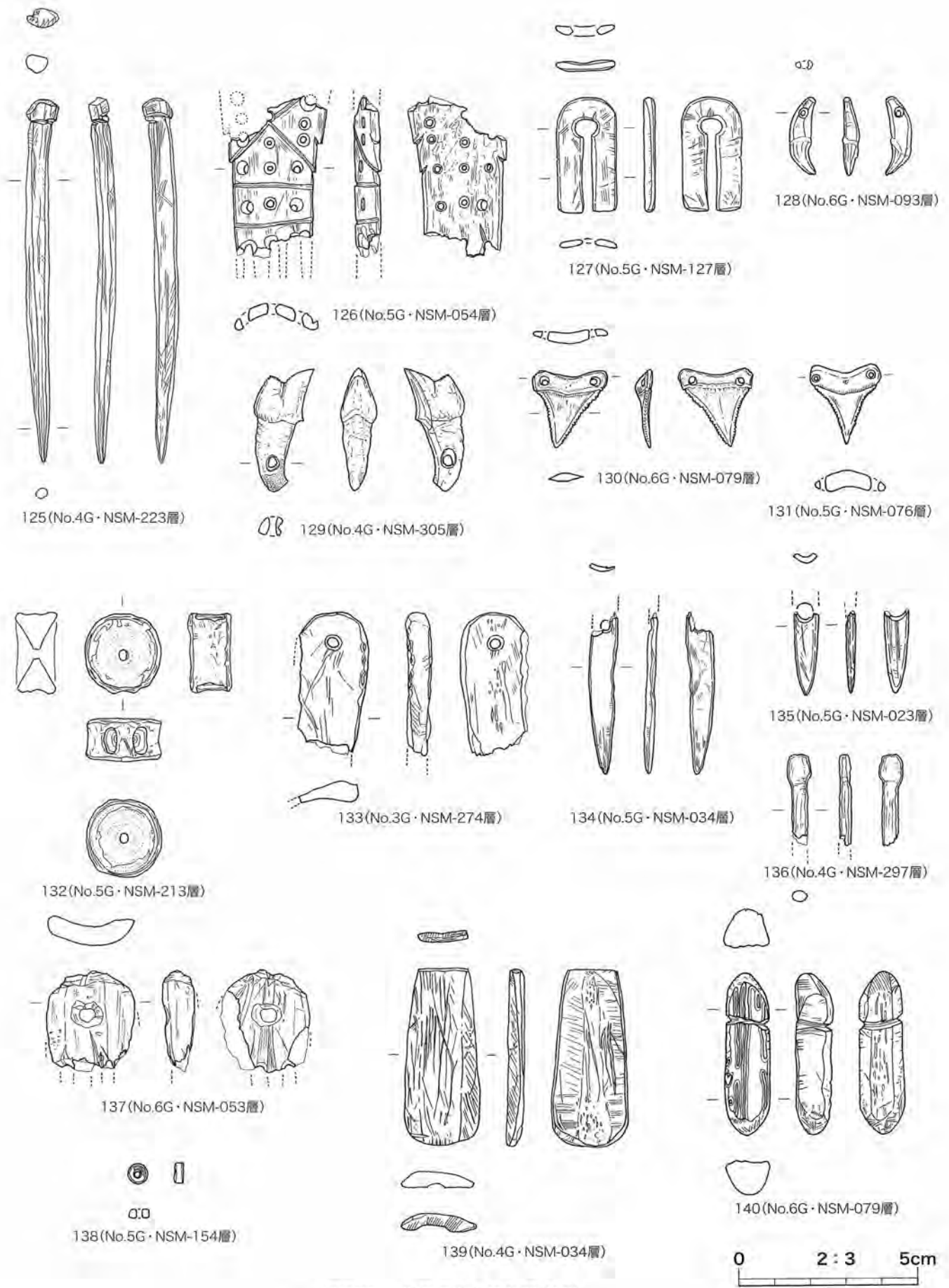
136は平坦な頭部を有する破片であり丁寧な調整痕が認められる。先端部を欠くが髪針の可能性はある。

## (9) 櫛

126は鹿角製の櫛である。半裁した鹿角の海綿体質部を除去した板状のものを加工した精巧な製品である。正面の現存部上半には「X」字形の沈線を、下半には平行する2条の沈線を施し、その間に円孔を充填する。下端には3個の円孔がありこれを起点として4本の歯が作り出されており、縦方向の擦痕が確認される。また、縁辺には刻みを伴う棘状の装飾が加えられる。

## (10) 耳飾り

127は鹿角製の瑛状耳飾りである。やや小形ではあるが比較的丁寧な作りである。上端付近の円孔とこれと一体となった縦位置の切り込みがあり、石製の瑛状耳飾りと全く同じ形態となる。



第27図 北貝塚出土骨角器 (12)

### (11)垂飾品類

円孔を穿ち、紐を通し使用される垂飾品類を一括した。次の3類に細分される。

#### 1類(128～131)

動物の歯牙に穿孔する製品を一括した。

128はタヌキの右下顎犬歯を使用するもので、歯根部に穿孔される。

129はオオカミの下顎第一大臼歯を使用するもので全体のほぼ半分が現存する。歯根部に穿孔されるが、この付近を中心に黒色の付着物が認められ、一部欠損面や内面にも同様な付着物が認められることから、当初は垂飾品として製作されたものが、欠損後に何らかの再利用が図られたものと思われる。

130・131はホホジロサメの歯を使用するもので、歯根部の両端に穿孔される。

#### 2類(132～135・138)

獣骨・鳥骨・魚骨・貝殻等に穿孔するものを一括した。

132はサメの椎骨の中央に穿孔するものである。138は小形の貝製平玉である。両者ともに1点のみの出土であるが、本来はビーズ玉状に連ねて使用するものである。

133は鹿角を素材とするもので裏面の海綿体質部を除去した板状のものに穿孔する。器面の調整はやや粗く鹿角の凹凸を残す。

134・135は大形の鳥骨を素材とするもので、基部に穿孔し先端部を尖らせるものである。比較的丁寧に器面調整する。

#### 3類(137・139・140)

1・2類以外のものを一括した。

137は裏面の海綿体質部を除去した板状の鹿角を素材とする。現存部のほぼ中央に穿孔するが、回転ではなく削り込みによる。下端部に穿孔による円孔が2個あり、これに伴う縦方向の擦痕も確認され126同様に櫛となる可能性もあるが、欠損が著しく断定できなかったため、ここに分類した。器面調整はやや粗い。

139は鹿角を丁寧に研磨した板状のもので、垂飾品に穿孔する直前の未製品かと思われる。

140は短い棒状の鹿角に沈線を巡らせるものであるが用途は不明である。沈線に紐を結び垂飾品として使用するか、根付などのような使用法が想定される。

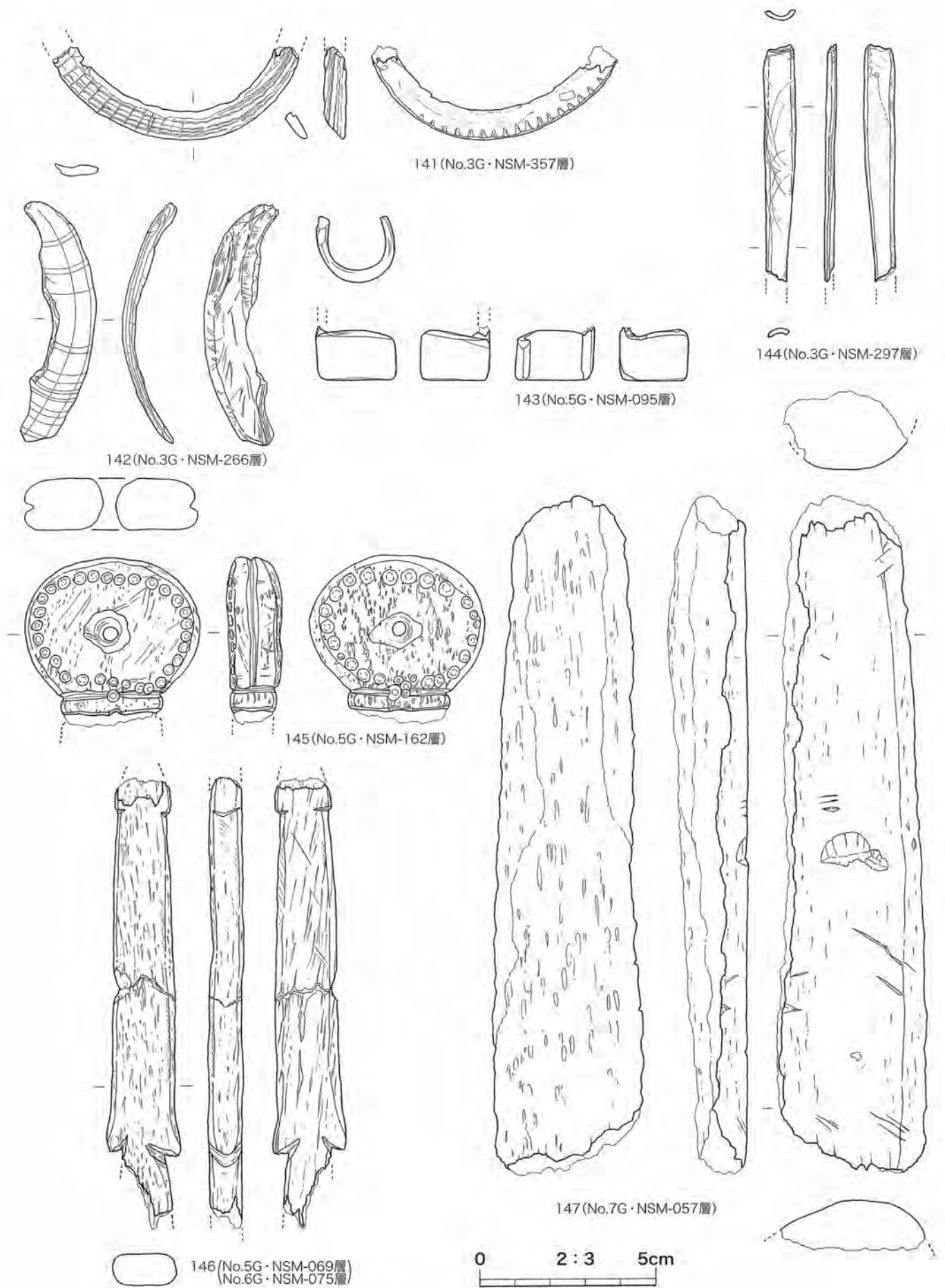
### (12)腕輪

141はベンケイガイ製の貝輪である。復縁部のみが現存しベンケイガイ特有の刻み目が認められる。

142はイノシシの右側下顎犬歯の舌側を使用するもので、側縁の一部を欠く。腕輪の未製品かと思われる。

### (13)指輪状製品

143は輪切りにした鹿角を丁寧に加工したもので、上面観は「U」字形を呈する。実測図上端の突起を欠くがほぼ完形品である。



第28図 北貝塚出土骨角器 (13)



#### (14) 札状製品

144は大形の鳥骨製の札状製品である。基部は関節部を除去した際の擦り切り痕があり、下端は欠損する。正面には極めて細い擦痕が認められる。針入れ等の欠損品の可能性もあるが用途不明の製品である。

#### (15) 鯨骨製品

145は骨刀の柄頭片である。中央部には回転により穿孔し、表裏面ともに周縁に小さな円形の窪み連続させる。下端に2条の平行沈線を施す他に、側面にも沈線を施す。形態から環頭の柄頭と言える。

146はやや小形であり、上下両端を欠く。やはり棒状か刀状製品の柄の部分だと思われる。上端部は柄頭に相当し、横方向の刻み目がありやや膨らむ。下端部には斜めの刻みがあり逆刺状となるが、柄と身の境界と思われる。

#### (16) 加工痕のある素材

骨・角・牙などに何らかの加工痕を有するもので、製品の素材として加工されたものや未製品のほかに骨角器の製作途中に除去された部分を含む。次の3類に細分される。

##### 1類 (148～151・172・173)

骨角器の製作途中に除去された部分と思われるものを一括した。

148～151はいずれも鹿角で釣針等を製作する際につまみとして機能し、最終的に切り離された部分である。

173は全面的に擦痕が認められるが、釣針などの製品から擦り切れ除去された部分と思われる。172は欠損するが173に類似するものと思われる。

##### 2類 (073・072・170・171・174)

骨や牙に加工痕を有するものである。

170は獣骨片に剥離痕を有するもの、171は擦痕を有するものである。174はイノシシの下顎犬歯に剥離痕を有するものである。

073・072は微かに擦痕らしい傷が認められへら状を呈するが、全面的に磨滅しており製品でない可能性が大きいのでここに分類した。

147はクジラの肋骨片で僅かに擦痕を有するものである。

##### 3類 (152～169・175～184)

鹿角に加工痕を有するものを一括した。未製品のほかに製品の素材や製作時に除去された部分を含むと思われるがその区別は難しい。

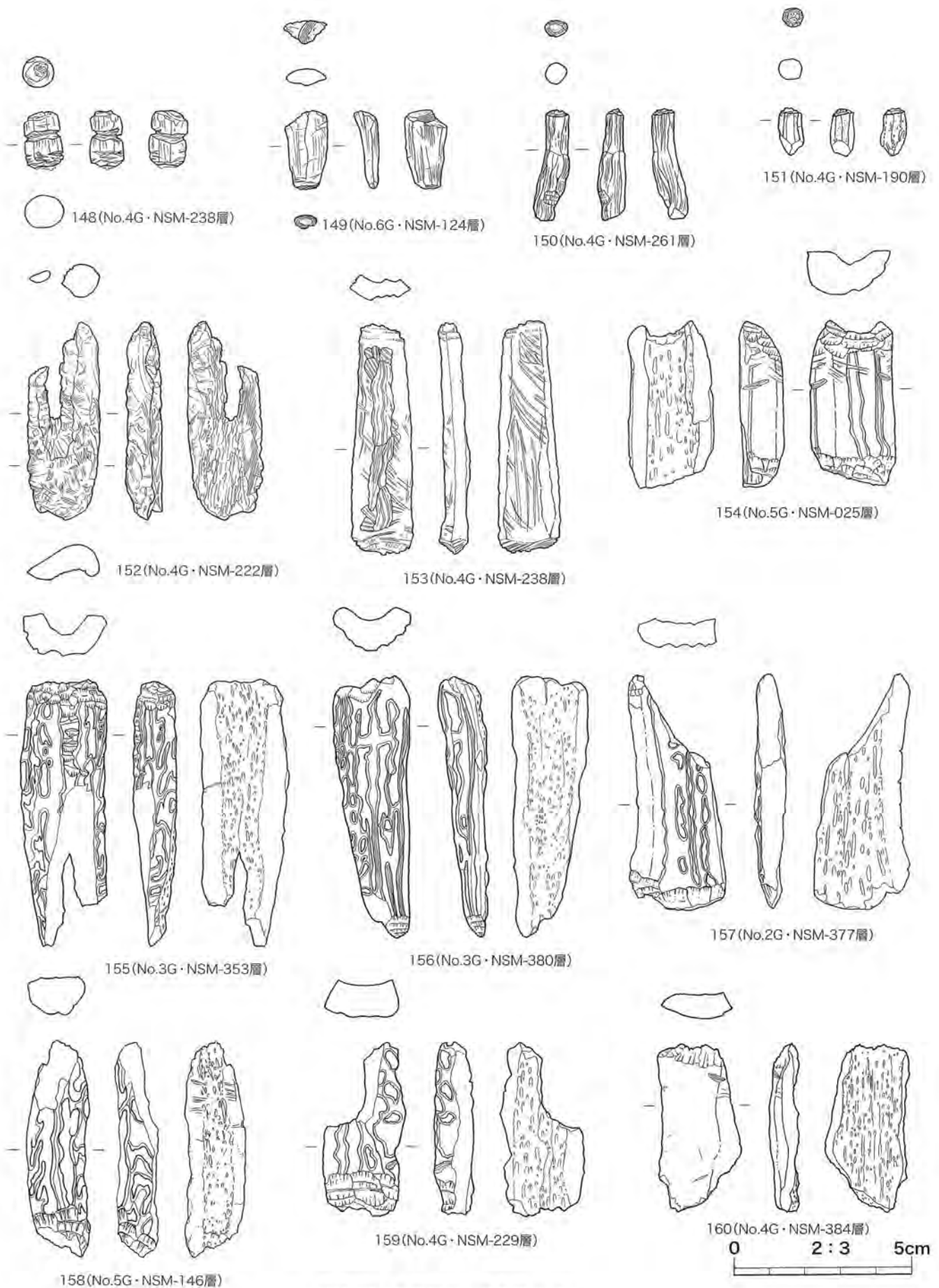
152は釣針形を呈し軸部に相当する部分も断面形が丸くなるため、釣針の未製品と思われる。

153は海綿体質部を除去し板状となった鹿角の中央部に縦の擦り切りを行ない、スリットを入れる途中のものである。釣針や装飾品類の未製品と思われる。

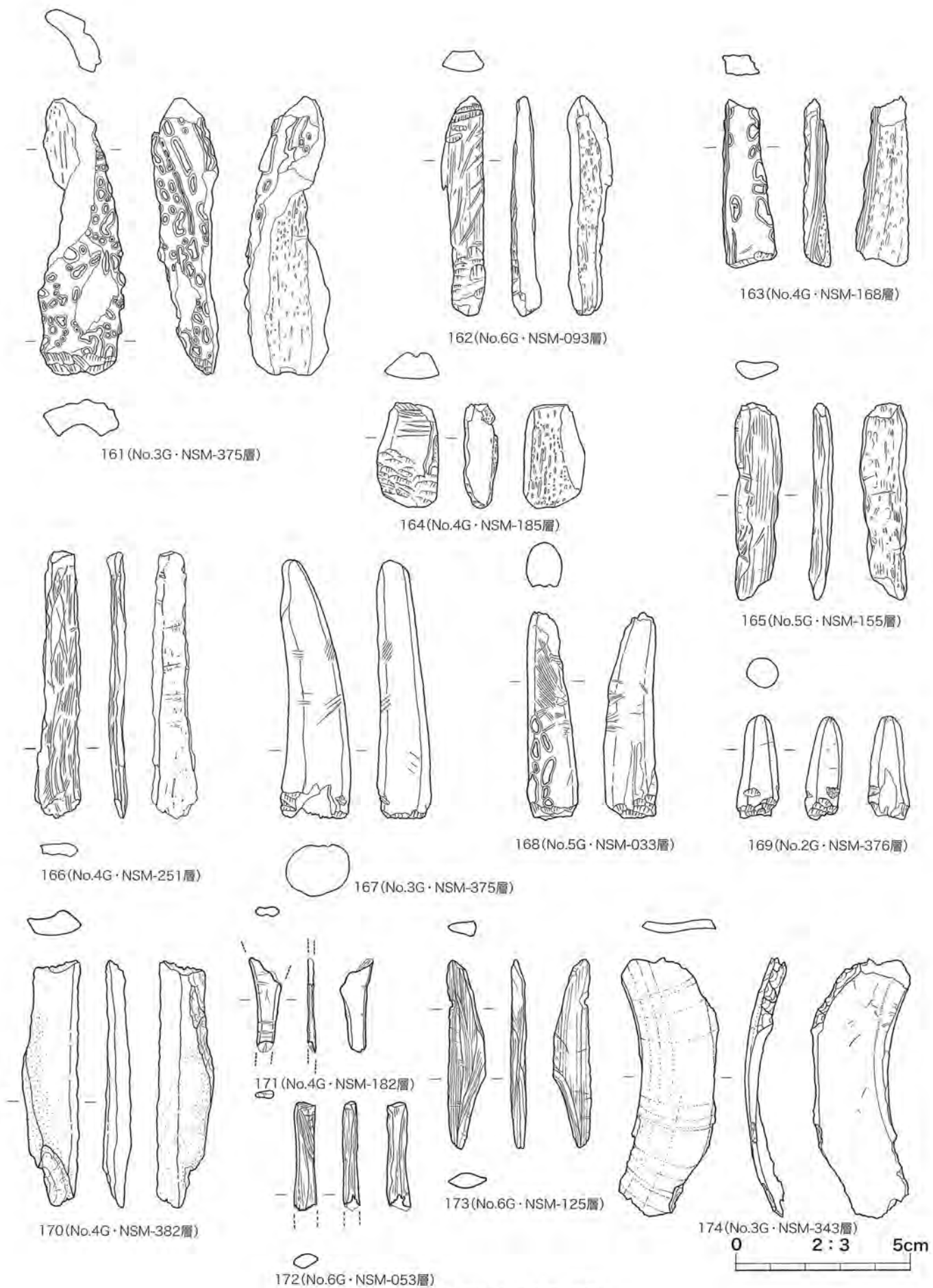
154～166は鹿角の幹部を打割し半裁したものである。167～169は打割により本体から遊離した角尖部である。

175～183は角座部や角叉部などで、いずれも端部に打割痕がある。177・178は落角を加工したものである。

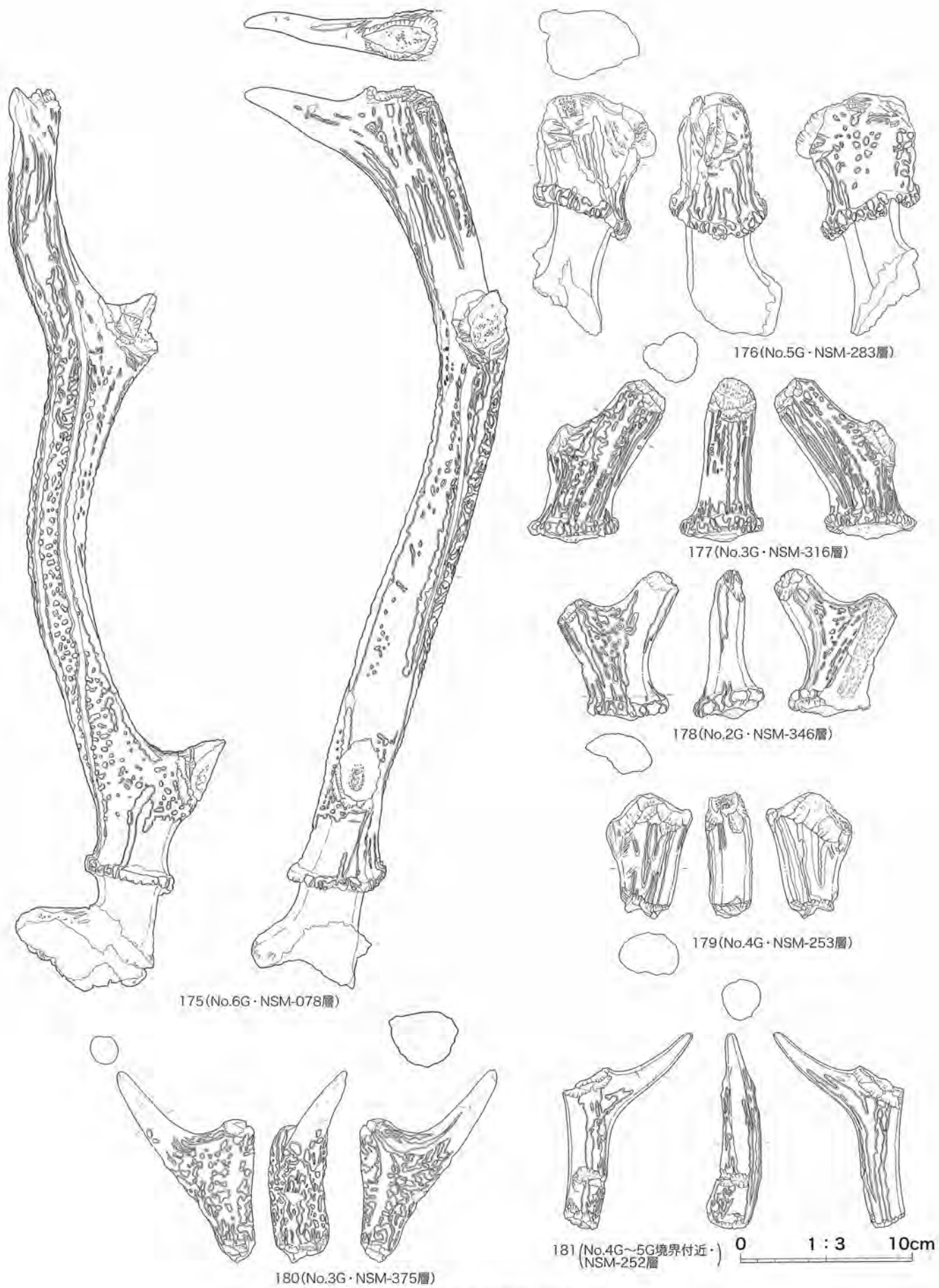




第29図 北貝塚出土骨角器 (14)

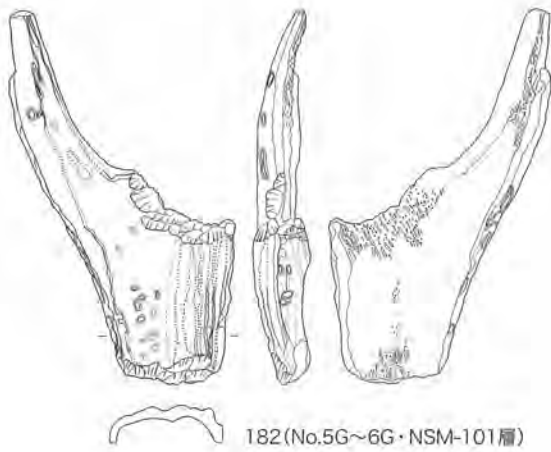


第30図 北貝塚出土骨角器 (15)



第31図 北貝塚出土骨角器 (16)

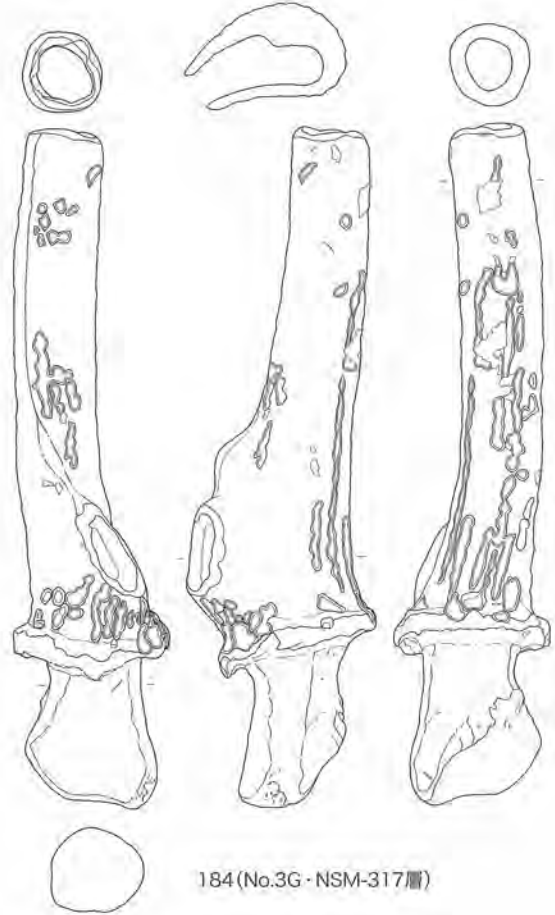
184は鹿角の上半部・第一角枝・頭蓋骨を除去したものであるが、器面全体が磨滅している。



182(No.5G~6G・NSM-101層)



183(No.4G・NSM-207層)  
(No.4G・NSM-223層)



184(No.3G・NSM-317層)

0 1:3 10cm

第32図 北貝塚出土骨角器(17)

押図番号	登録番号	出土年月日	地点	新層名	旧層名	時期	器種名	分類	使用素材	長さ(cm)	(計先の長さ)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
001	16-081	2000.6.22	No.5G	NSM-162	16-145B	縄文前期	鉋頭	—	鹿角	6.0	—	1.4	0.6	1.6	頭部・尾部の2部構造で、尾部は双距。尾部の裏側を折り柄溝とする。鉋頭では最大。
002	16-011	2000.6.15	No.5G	NSM-155	16-140	縄文前期	鉋頭	—	鹿角	4.4	—	1.1	0.4	1.0	頭部・尾部の2部構造で、尾部は双距。尾部の裏側を折り柄溝とする。001よりやや小形。
003	17-223	2001.7.4	No.5G	NSM-283	17-249	縄文前期後葉	鉋頭	—	鹿角	3.3	—	1.0	0.4	0.5	頭部と尾部の境界が明瞭。尾端の湾入が深い。
004	16-035	2000.6.27	No.5G	NSM-164・NSM-179・NSM-186	16-148・16-161・16-169	縄文前期	鉋頭	—	鹿角	0.8	—	0.9	0.3	0.6	尾端の湾入が深く、端部が尖らない。欠損後の再加工か。
005	16-326	2000.8.3	No.5G	NSM-208	16-179	縄文前期	鉋頭	—	鹿角	0.5	—	0.6	0.3	0.2	柄溝が頭部に達する。焼成を受けて黒変。鉋頭では最小。
006	19-367	2003.8.19	No.2G	NSM-370	19-331	縄文前期	ヤス	—	獣骨(シカ中手・中足骨か)	6.5	—	0.8	0.7	2.9	基部を欠く。先端部はやや鈍く、器面全体に粗い擦痕あり。
007	15-036	1999.8.19	No.3G	NSM-274	15-C25	縄文前期	釣針	1類	鹿角	1.7	1.2	0.7	0.3	0.2	1類では最小。「し」字形・無縁。チモト上部は折取り後に研磨する。湾曲部下端も研磨して仕上げられる。
008	15-002	1999.6.29	No.6G	NSM-035	15-034	縄文中期前葉	釣針	i類	鹿角	2.2	1.4	0.9	0.3	0.2	「し」字形・無縁。チモト上部は擦切り、折取る。湾曲部下端は折取り後に研磨する。
009	15-013	1999.6.18	No.5G	NSM-029	15-029	縄文中期	釣針	i類	鹿角	3.7	1.9	1.1	0.4	0.6	「し」字形・無縁。軸断面はほぼ六角形。チモト頂部、湾曲部下端を含めて全体を丁寧に研磨する。
010	16-179	2000.10.13	No.4G	NSM-270	16-237	縄文前期	釣針	i類	鹿角	4.1	3.0	1.4	0.6	1.6	「し」字形・無縁。チモト上部、湾曲部下端ともに研磨するが折取り痕が見られる。
011	16-118	2000.8.21	No.4G	NSM-202	16-190	縄文前期	釣針	1類	鹿角	4.0	2.1	1.7	0.6	1.7	「し」字形・無縁。針先を欠く。チモト上部、湾曲部下端ともに研磨するが折取り痕あり。
012	16-222	2000.10.5	No.4G	NSM-257	16-227	縄文前期	釣針	1類	鹿角	3.9	2.6	1.5	4.9	1.1	「し」字形・無縁。チモト上部は折取り後に研磨する。湾曲部角あり、下端に粗い擦痕あり。
013	16-021	2000.5.31	No.5G	NSM-136	16-120	縄文前期後葉	釣針	1類	鹿角	5.0	3.0	1.7	0.7	1.8	「し」字形・無縁。チモト上部、湾曲部下端ともに研磨するが折取り痕が見られる。
014	16-123	2000.8.25	No.4G	NSM-207	16-195	縄文前期後葉	釣針	1類	鹿角	5.5	3.5	2.1	0.8	4.3	「し」字形・無縁。チモト上部、湾曲部下端ともに丁寧に研磨する。
015	16-178	2000.10.16	No.4G	NSM-272	16-239	縄文前期中葉	釣針	1類	鹿角	4.2	3.0	1.6	0.7	1.6	「し」字形・内縁。チモト上部は丁寧に研磨する。湾曲部角あり、下端欠損。
016	16-066	2000.7.3	No.4G	NSM-177	16-160	縄文前期	釣針	1類	鹿角	3.1	2.0	1.3	0.5	0.9	「し」字形・外縁。チモト上部は折取り後に研磨する。湾曲部下端に粗い擦痕あり。
017	15-017	1999.6.15	No.5G	NSM-027	15-027	縄文中期	釣針	1類	鹿角	3.2	—	0.7	0.4	0.4	「し」字形。チモト上部は丁寧に研磨する。湾曲部下端に粗い擦痕あり。
018	16-225	2000.11.9	No.5G	NSM-282	16-248	縄文前期	釣針	1類	鹿角	3.3	1.2	1.3	0.5	0.6	「し」字形・無縁か。軸断面は六角形。チモト上部、湾曲部下端ともに丁寧に研磨する。
019	17-298	2001.10.2	No.3G	NSM-317	17-283	縄文前期	釣針	i類	鹿角	3.8	—	0.9	0.5	0.8	「し」字形。軸断面は多角形。チモト上部、湾曲部下端ともに丁寧に研磨する。
020	15-028	1999.7.21	No.3G	NSM-236	15-C11	縄文前期	釣針	1類	鹿角	4.8	—	1.0	0.7	0.8	「し」字形。チモト上部は丁寧に研磨する。湾曲部下端に擦切りの痕跡あり。
021	16-157	2000.10.10	No.4G	NSM-261	16-230	縄文前期中葉	釣針	1類	鹿角	5.0	—	0.8	0.5	1.2	「し」字形。チモト上部は丁寧に研磨する。
022	16-221	2000.5.29	No.5G	NSM-134・NSM-135・NSM-136	16-119・16-118・16-120	縄文前期後葉	釣針	1類	鹿角	5.4	—	1.0	0.7	1.6	「し」字形。チモト上部は丁寧に研磨する。軸部は稜が明瞭で断面形も角張る(未製品か)。
023	17-248	2001.10.25	No.3G	NSM-332	17-293	縄文前期	釣針	1類	鹿角	4.6	—	1.2	0.5	1.0	「し」字形。軸断面は六角形。チモト上部は擦切り、折取り後に調整なし。湾曲部下端は研磨。
024	16-076	2000.6.6	No.5G	NSM-144・NSM-146・NSM-147	16-129・16-131・16-132	縄文前期	釣針	i類	鹿角	3.1	—	0.6	0.7	0.9	チモト上部は擦切り、折取り後に調整なし。
025	17-244	2001.10.4	No.5G	NSM-318	17-284	縄文前期中葉	釣針	1類	鹿角	2.8	—	0.7	0.5	0.9	チモト上部は擦切り、折取り後に研磨する。
026	15-018	1999.6.11	No.5G	NSM-025	15-025	縄文中期	釣針	1類	鹿角	3.4	—	0.7	0.7	0.9	チモト上部は擦切り、折取り後にやや丁寧に研磨する。
027	16-163	2000.9.21	No.4G	NSM-242	16-219	縄文前期	釣針	1類	鹿角	4.0	—	0.9	0.7	2.2	チモト上部は擦切り、折取り後に研磨する。
028	16-277	2000.6.23	No.5G	NSM-161	16-146	縄文前期	釣針	1類	鹿角	0.6	—	0.4	0.4	0.1	チモト上部は擦切り、折取り後に研磨する。
029	16-276	2000.6.23	No.5G	NSM-161	16-146	縄文前期	釣針	1類	鹿角	0.5	—	0.3	0.3	0.0	チモト上部は擦切り、折取り後に研磨する。

第7表 北貝塚出土骨角器一覧表(1)



種目 番号	登録 番号	出土 年月日	地点	新層名	旧層名	時期	器種名	分類	使用 素材	長さ (cm)	(針先の 長さ)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
030	16-031	2000.6.7	No.5G	NSM-148	16-133	縄文前期	釣針	針先部破片	鹿角	2.7	2.7	1.0	0.6	0.5	「し」字形・無織。湾曲部下端に軽い擦痕あり。
031	16-279	2000.6.29	No.4G	NSM-173	16-156	縄文前期後葉	釣針	針先部破片	鹿角	2.9	2.9	0.9	0.6	0.7	「し」字形・無織。
032	17-296	2001.7.10	No.6G	NSM-284	17-250	縄文前期	釣針	針先部破片	鹿角	2.7	2.7	1.2	0.7	0.7	「し」字形・無織。
033	16-027	2000.5.18	No.5G	NSM-120	16-105	縄文前期	釣針	針先部破片	鹿角	3.0	3.0	1.1	0.4	0.9	「し」字形・無織。裏が明瞭で断面形も角張る(未製品か)
034	15-008	1999.7.27	No.6G	NSM-060	15-057	縄文中期	釣針	針先部破片	鹿角	3.6	3.6	1.5	0.7	0.9	「し」字形・無織。湾曲部下端は折取り後に丁寧に研磨する。
035	16-139	2000.8.31	No.5G	NSM-154	16-139	縄文前期後葉	釣針	針先部破片	鹿角	5.4	5.4	1.9	0.9	2.6	「し」字形・無織。湾曲部下端に折取り痕あり。
036	16-158	2000.10.10	No.4G	NSM-261	16-230	縄文前期中葉	釣針	針先部破片	鹿角	2.5	2.5	1.3	0.5	0.7	「し」字形・内織。湾曲部下端に擦痕あり。
037	16-280	2000.7.3	No.4G	NSM-177	16-160	縄文前期	釣針	針先部破片	鹿角	2.2	2.2	1.1	0.5	0.5	「し」字形・外織。湾曲部下端は丁寧に研磨する。
038	16-312	2000.7.31	No.5G	NSM-194	16-175	縄文前期	釣針	湾曲部破片	鹿角か	1.6	-	0.4	0.2	0.1	「し」字形。軸部の断面形は4角形。焼成を受ける。
039	16-017	2000.6.19	No.4G	NSM-159	16-143	縄文前期	釣針	湾曲部破片	鹿角	2.7	-	1.0	0.4	0.7	「し」字形・無織。軸部の断面形は平坦で、未製品の可能性もあり。
040	16-281	2000.6.1	No.6G	NSM-137	16-121	縄文前期後葉	釣針	湾曲部破片	鹿角	2.2	-	1.2	0.5	0.6	「し」字形。湾曲部角あり、下端は折取り後に研磨する。
041	18-331	2002.11.11	No.3G	NSM-343	18-303	縄文前期	釣針	湾曲部破片	鹿角	1.2	-	1.0	0.4	0.4	「し」字形。断面形は4角形。湾曲部下端は研磨する。
042	16-069	2000.6.29	No.4G	NSM-172	16-155	縄文前期後葉	釣針	湾曲部破片	鹿角	2.1	-	0.8	0.5	0.6	「し」字形。軸部の断面は角張り、未製品の可能性もあり。
043	19-405	2003.8.20	No.3G	NSM-375	19-333	縄文前期前葉	釣針	湾曲部破片	鹿角	2.4	-	1.4	0.7	1.3	「し」字形。全体に擦痕あり。
044	15-038	1999.10.7	No.4G	NSM-112	15-101C	縄文前期	釣針	湾曲部破片	鹿角	2.7	-	1.1	0.7	0.8	「し」字形。湾曲部に段あり。
045	15-025	1999.9.28	No.5G	NSM-098	15-095	縄文中期	釣針	湾曲部破片	鹿角	3.3	-	0.9	0.5	0.9	「し」字形。全体に擦痕あり。
046	15-030	1999.7.9	No.3G	NSM-232	15-C10	縄文前期	釣針	湾曲部破片	鹿角	3.7	-	1.4	0.8	2.4	湾曲部が角張る。
047	16-144	2000.9.14	No.4G	NSM-226	16-208	縄文前期	釣針	湾曲部破片	鹿角	4.0	-	1.0	0.4	1.0	「し」字形。軸部の断面形は平坦で、未製品の可能性もあり。
048	19-357	2003.5.23	No.3G	NSM-351	19-311	縄文前期中葉	釣針	湾曲部破片	鹿角	3.4	-	0.8	0.5	0.6	「し」字形。軸部の断面形は5角形。焼成を受ける。
049	19-345	2003.5.26	No.3G	NSM-350	19-312	縄文前期中葉	釣針	湾曲部破片	鹿角	2.6	-	0.6	0.4	0.6	「軸部の断面形は多角形。焼成を受ける。
050	19-336	2003.7.15	No.3G	NSM-367	19-328	縄文前期前葉	釣針	湾曲部破片	鹿角	4.0	-	1.9	0.4	0.9	「し」字形か。断面形は平坦で、未製品の可能性もあり。
051	16-018	2000.6.20	No.4G	NSM-159	16-144	縄文前期後葉	釣針	湾曲部破片	鹿角	3.9	-	0.9	0.6	1.4	湾曲部が角張る。断面形は4角形で稜があり、未製品の可能性もあり。
052	16-099	2000.7.7	No.4G	NSM-185	16-170	縄文前期	釣針	湾曲部破片	鹿角	4.8	-	0.7	0.5	1.4	湾曲部が角張る。断面形は4角形で稜があり、未製品の可能性もあり。
053	15-005	1999.8.19	No.6G	NSM-067	15-067	縄文中期	釣針	湾曲部破片	鹿角	5.8	-	1.2	0.6	2.7	「し」字形。軸部の断面形は平坦で、裏面全体に海綿体質部を残す。2類の可能性もあり。
054	16-010	2000.6.15	No.5G	NSM-155	16-140	縄文前期	釣針	2A類	鹿角(角尖部)	7.8	-	1.2	1.2	7.2	チモト部が角先、湾曲部が角叉。チモト部の沈線は斜位。軸部中央に最大径を有す。
055	16-012	2000.6.19	No.5G	NSM-156	16-141	縄文前期	釣針	2A類	鹿角	6.2	-	1.5	1.2	0.9	チモト部の沈線は斜位。軸部ほぼ中央に最大径を有す。裏面に大きく海面体質部を残す。
056	19-387	2003.9.1	No.3G	NSM-380	19-341	縄文前期前葉	釣針	2A類	鹿角	7.3	-	1.5	1.3	8.7	チモト部の沈線は水平。軸部に最大径を有す。裏面に大きく海面体質部を残す。
057	16-043	2000.6.1	No.5G～6G 境界付近	NSM-137	16-121	縄文前期後葉	釣針	2A類	鹿角(角尖部)	8.3	-	0.9	0.9	3.2	チモト部が角先、湾曲部が角叉。チモト部の沈線は水平。チモト部付近に最大径を有す。チモト頂部は擦切り、折取り後に研磨。軸部に螺旋形のピッチが残存。
058	16-103	2000.8.28	No.5G	NSM-126	16-114	縄文前期	釣針	2A類	鹿角(角尖部)	8.4	-	0.6	1.5	8.5	チモト部が角先、湾曲部が角叉。チモト部の沈線は水平。チモト部付近に最大径を有す。チモト頂部は擦切り、折取り後に研磨。
059	19-369	2003.9.16	No.4G	NSM-387	19-347	縄文前期前葉	釣針	2A類	鹿角(角尖部)	7.4	-	1.9	1.6	11.0	チモト部が角先、湾曲部が角叉。チモト部の沈線は斜位。軸部中央に最大径を有す。
060	16-182	2000.10.19	No.4G	NSM-277	16-242	縄文前期後葉	釣針	2A類	鹿角(角尖部)	7.9	-	2.1	2.0	14.6	チモト部が角先、湾曲部が角先。チモト部付近に最大径を有す。軸部に鹿角の凹凸を残す。
061	16-266	2000.8.10	No.5G～6G 境界付近	NSM-053	15-056	縄文中期	釣針	2B類	鹿角	7.3	-	1.5	0.9	8.3	鹿角の半裁品を使用し裏面に大きく海綿体質部を残す。チモト部の沈線は水平。

第8表 北貝塚出土骨角器一覧表(2)

押図番号	登録番号	出土年月日	地点	新層名	旧層名	時期	器種名	分類	使用素材	長さ(cm)	(針先の長さ)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
062	16-105	2000.7.6	No.4G	NSM-183	16-168	縄文前期	釣針	3類	鹿角	7.0	-	1.2	0.5	2.2	チモト部に切込みを有する。軸部の断面形はほぼ6角形で縁が目立つ。側面に擦切り痕が残存。
063	16-104	2000.7.6	No.5G	NSM-184	16-167	縄文前期	釣針	3類	鹿角	3.3	-	0.7	0.5	0.6	「し」字形。全体的に摩滅。チモト部は064に類似。
064	16-148	2000.9.8	No.4G	NSM-220	16-203	縄文前期	釣針	3類	鹿角	3.1	-	0.8	0.5	0.8	「し」字形。チモト部に横方向と縦方向の沈線が施す。
065	16-224	2000.11.6	No.4G	NSM-275	16-243	縄文前期	釣針	3類	鹿角(角尖部か)	10.2	-	1.9	11.9	5.4	「し」字形。チモト部に前後から穿孔する貫通孔あり。軸部に螺旋形の凹凸あり。湾曲部に角あり。素材取りの方法が2A類に似る。
066	15-029	1999.7.21	No.3G	NSM-236	15-C11	縄文前期	釣針	1類	鹿角	4.3	-	0.7	0.4	1.0	チモト上部は折取り後に研磨。下端部は擦切り後に折取りの痕跡があり、欠損した釣針の再利用を図った可能性が大きい。
067	18-332	2002.11.13	No.2G~3G境界付近	NSM-344	18-304	縄文前期	釣針	4類	鹿角	5.3	-	1.1	0.7	2.5	針先部のみ完形品。針先はやや内湾し、カエシがある。軸部は丸みを有する6角形。下端部は折取り後に研磨。結合式釣針の可能性が大きい。
068	16-220	2000.11.7	No.4G	NSM-279	16-245	縄文前期	ヘラ	1類	シカ尺骨(L)近位部~中央部	17.3	-	4.9	2.7	3.2	先端部(機能部)は平坦で丸みを有し、使用痕とされる剥離や増減がある。基部は関節部をそのまま残し「置り」とする。
069	15-016	1999.6.4	No.5G	NSM-023	15-023	縄文中期	ヘラ	2類	シカ中足骨	5.7	-	2.0	0.8	5.2	中足骨を半裁した典型的な骨節で、先端部は両方で横方向の使用痕がある。欠損後に再利用され、器面全体にピッチが付着する。
070	17-235	2001.9.13	No.3G	NSM-298	17-264	縄文前期	ヘラ	2類	シカ中手・中足骨	7.5	-	1.6	0.5	6.6	中手・中足骨を半裁した典型的な骨節で、先端部は両方で縦方向の使用痕がある。
071	15-307	1999.10.7	No.4G	NSM-110	15-99F	縄文前期	ヘラ	2類	シカ中手・中足骨	4.9	-	0.8	0.5	1.6	中手・中足骨を裁断した典型的な骨節で、先端部は両方で縦方向の使用痕がある。
072	17-415	2001.10.18	No.3G	NSM-326	17-288	縄文前期	加工痕のある素材	2類	陸獣骨	3.7	-	0.8	0.5	0.0	全体的に磨滅しており、形を作ったのは自然の営為と思われる。器面に性格不明の擦痕が若干ある。
073	19-368	2003.8.19	No.3G	NSM-370	19-331	縄文前期	加工痕のある素材	2類	陸獣骨	6.8	-	1.4	0.4	4.0	形状はヘラに類似するが、全体的に磨滅しているで形を作ったのは自然の営為と思われる。器面に性格不明の擦痕がわずかにある。
074	17-239	2001.10.18	No.3G	NSM-326	17-288	縄文前期	ヘラ	2類	鹿角	5.5	-	1.6	0.6	4.9	角節、表裏面ともに比較的丁寧に調整する。側面に擦切り痕が残存。
075	19-343	2003.5.23	No.3G	NSM-351	19-311	縄文前期中葉	リタッチャー	1類	鹿角	7.1	-	1.3	0.8	6.2	所謂棒状角製品。先端部は丸みを有し粗く面取りされた状態で、粗い擦痕が集中する。
076	19-364	2003.8.20	No.3G	NSM-375	19-333	縄文前期前葉	リタッチャー	1類	鹿角	6.3	-	1.9	0.9	7.8	先端部はやや尖り粗く面取りされた状態で、粗い擦痕がある。角節の基部となる可能性もある。
077	16-063	2000.7.3	No.5G	NSM-179	16-161	縄文前期	リタッチャー	1類	鹿角	5.5	-	0.9	0.7	2.8	やや細身の所謂棒状角製品。先端部は丸みを有し粗く面取りされた状態で、粗い擦痕が集中する。
078	16-036	2000.6.6	No.5G	NSM-144	16-129	縄文前期	リタッチャー	1類	鹿角	4.1	-	0.9	0.5	1.6	やや細身の所謂棒状角製品。先端部は平坦で、粗い擦痕がある。
079	16-138	2000.9.7	No.5G	NSM-269	16-231	縄文前期後葉	リタッチャー	2類	鹿角	10.5	-	2.2	1.7	22.2	先端部は丸みを帯び面取りされた状態で、粗い擦痕がある。上下両端にダメージがあり、ソフト・ハンマーとしての使用も想定される。2A類釣針の再利用品。
080	16-198	2000.10.11	No.5G	NSM-269	16-231	縄文前期後葉~中葉	リタッチャー	2類	鹿角(L)角座~第1枝(落角)	13.1	-	9.2	4.7	95.8	角先に粗い擦痕あり。角枝中央にダメージがあり、ソフト・ハンマーとしての使用も想定される。
081	16-210	2000.11.9	No.4G	NSM-282	16-248	縄文前期	リタッチャー	2類	鹿角(角尖部)	8.4	-	3.2	1.4	12.7	角先に粗い擦痕あり。基部には打割痕あり。
082	16-026	2000.5.29	No.5G	NSM-131	16-117	縄文前期後葉	リタッチャー	2類	鹿角(角尖部)	9.5	-	1.6	1.5	10.8	角先に粗い擦痕あり。上下両側に剥片石器の刃部調整を行った際の鼠歯状痕が集中する部分がある。
083	16-071	2000.6.12	No.5G~6G境界	NSM-151	16-136	縄文前期後葉	ヘラ	3類	鹿角	9.2	-	2.9	2.7	36.2	先端部はやや尖り、平坦で面取りされた状態となり粗い擦痕あり。基部は沈線が巡る。基部付近に鼠歯状痕が集中。2A類釣針→3類ヘラ→リタッチャーと転用される。
084	16-073	2000.6.29	No.4G	NSM-173	16-156	縄文前期後葉	ヘラ	3類	鹿角	10.3	-	3.2	2.9	30.6	先端部はやや尖り、平坦で面取りされた状態となり粗い擦痕あり。基部に沈線が施す。2A類釣針→3類ヘラと転用される。
085	16-405	2000.9.14	No.4G~5G境界	NSM-225	16-209	縄文前期	骨針	1類	陸獣骨	5.3	-	0.4	0.2	0.4	小形だが典型的な骨針。表裏両面からの穿孔。

第9表 北貝塚出土骨角器一覧表(3)

挿図 番号	登録 番号	出土 年月日	地点	新層名	旧層名	時期	器種名	分類	使用 素材	長さ (cm)	(針先の 長さ)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
086	15-006	1999.8.11	No.6G	NSM-070	15-066	縄文中 期前葉	骨針	1類	陸獣骨 (シカ中 手・中足 骨か)	7.9	-	0.6	0.8	1.2	小形だが典型的な骨針。表裏両 面からの穿孔。よく使い込まれ器 面全体に光沢がある。
087	16-162	2000.9.21	No.4G	NSM-238	16-217	縄文前 期	骨針	2類	陸獣骨	9.4	-	1.5	1.4	6.8	形状はヘラに類似するが、器面 全体に光沢がある。基部には表裏 両面からの擦切りによる穿孔あり。
088	17-238	2001.10.17	No.3G	NSM-325	17-287	縄文前 期中葉	骨針	2類	シカ中 手・中足 骨	9.9	-	1.4	0.5	4.9	所謂大型針で4分割した中手・中 足骨を素材とする。表裏両面から の穿孔。側面に擦切り痕が残存。
089	17-295	2001.10.9	No.3G	NSM-322	17-286	縄文前 期中葉	骨針	2類	シカ中 手・中足 骨	9.0	-	1.0	0.4	4.9	所謂大型針で4分割した中手・中 足骨を素材とする。表裏両面から の穿孔。先端部は面取りされる。 器面全体に光沢あり。
090	15-010	1999.9.20	No.6G	NSM-094	15-090	縄文中 期	骨針	1類	鹿角	1.8	-	0.9	0.3	0.3	表裏両面からの擦切りによる穿 孔あり。
091	16-016	2000.5.31	No.4G～5G	NSM-136	16-120	縄文前 期後葉	骨針	1類	陸獣骨	3.8	-	1.0	0.4	1.4	表裏両面からの擦切りによる穿 孔あり。
092	15-021	1999.9.14	No.5G	NSM-085	15-081	縄文中 期	骨針	1類	陸獣骨	5.8	-	0.6	0.4	1.1	基部に沈線が巡る。基部と先端 部の両側を使用する針。
093	19-388	2003.8.7	No.2G	NSM-369	19-330	縄文前 期	骨針	1類	陸獣骨 (シカ中 手・中足 骨か)	8.2	-	0.5	0.5	1.7	断面形は円形でほぼ同じ太さ。先 端部に回転痕あり。
094	18-410	2002.11.18	No.2G～3G 境界付近	NSM-350	19-312	縄文前 期中葉	骨針	1類	大型の鳥 骨か	8.8	-	0.5	0.2	0.7	基部・先端部ともに尖るが糸かけ を持たない。何らかの欠損品を針 状に加工したものの。
095	16-119	2000.8.21	No.5G	NSM-282	16-248	縄文前 期	刺突具	1類	シカ尺骨 (R)近位 部	8.7	-	1.1	1.0	3.9	先端部がナイフ状に尖り、使用時 の縦方向の擦痕あり。
096	16-183	2000.10.11	No.5G	NSM-269	16-231	縄文前 期後葉 ～中葉	刺突具	1類	シカ中手 骨(L)近 位部	9.7	-	1.5	0.7	5.1	中手骨を4分割した前面右側を 使用し、関節部を欠く。先端部は 面取りされる。
097	15-032	1999.8.10	No.3G	NSM-268	15-C21	縄文前 期	刺突具	1類	シカ中足 骨	9.2	-	1.4	1.1	5.4	中足骨を半裁したものを使用。先 端部は平坦でよく使い込まれ、光 沢や擦痕がある。
098	16-141	2000.9.7	No.5G	NSM-218	16-200	縄文前 期後葉	刺突具	1類	シカ尺骨 (L)近位 部	8.3	-	1.1	0.8	3.8	先端部を欠き回転痕の有無は不 明。器面の擦痕は調整痕。
099	16-268	2000.5.15	No.5G	NSM-155	16-140	縄文前 期	刺突具	1類	陸獣骨	7.9	-	1.0	0.6	2.8	先端部は面取りされる。
100	16-019	2000.6.19	No.5G	NSM-156	16-141	縄文前 期	刺突具	1類	鹿角	5.9	-	1.4	0.6	2.5	先端部付近の断面形は楕円形。 先端部を欠き回転痕の有無は不 明。
101	16-003	2000.5.25	No.6G	NSM-128	16-111	縄文前 期後葉	刺突具	2類	シカ中足 骨(R)近 位部～中 央部	14.5	-	1.4	0.9	6.4	中足骨を4分割した前面左側を 使用。先端部に回転痕がある。
102	16-177	2000.10.12	No.4G	NSM-270	16-237	縄文前 期	刺突具	2類	シカ中足 骨(R)近 位部～中 央部	16.1	-	1.1	0.8	8.2	中足骨を4分割した後面左側を 使用。先端部に回転痕がある。基 部は関節を欠く。
103	16-174	2000.10.4	No.4G	NSM-258	16-225	縄文前 期	刺突具	2類	シカ中手 骨(R)近 位部～中 央部	15.4	-	1.2	0.8	8.1	中手骨を4分割した後面左側を 使用。先端部に回転痕がある。基 部は関節を欠く。
104	16-180	2000.10.12	No.4G	NSM-270	16-237	縄文前 期	刺突具	2類	シカ中 手・中足 骨か	6.1	-	1.1	0.5	3.1	先端部に回転痕がある。使い込 まれ全体に光沢あり。完形品。
105	19-351	2003.6.2	No.2G	NSM-357	19-317	縄文前 期	刺突具	2類	シカ中 手・中足 骨か	6.1	-	0.9	0.4	2.2	先端部に回転痕があり。
106	15-004	1999.8.6	No.6G	NSM-061	15-058	縄文中 期	刺突具	2類	シカ中 手・中足 骨か	5.4	-	0.6	1.0	1.1	先端部に回転痕があり。完形品。
107	17-233	2001.9.12	No.4G	NSM-297	17-263	縄文前 期	刺突具	2類	シカ中 手・中足 骨	9.6	-	1.5	0.8	7.8	先端部に回転痕があり。関節部 には裁断時の剥離痕あり。
108	15-033	1999.7.26	No.3G	NSM-241	15-C18	縄文前 期	刺突具	2類	シカ中 手・中足 骨か	6.6	-	0.8	0.3	1.2	先端部に回転痕があり。骨針の可 能性もあり。
109	16-160	2000.10.4	No.4G	NSM-254	16-223	縄文前 期	刺突具	2類	シカ中 手・中足 骨	8.0	-	0.8	0.5	2.6	先端部に回転痕があり。先端部と 軸部の境界が屈曲する。
110	15-024	1999.9.14	No.5G	NSM-084	15-080	縄文中 期	刺突具	2類	シカ中 手・中足 骨か	7.4	-	0.6	0.4	1.6	中手・中足骨片をそのまま使用す る。先端部にだけ回転による使用 痕がある。
111	16-028 +029	2000.6.27	No.4G	NSM-168	16-153	縄文前 期	刺突具	2類	鹿角	11.2	-	0.9	0.5	2.8	基部付近に沈線等による装飾が あり、ヘアピンなどの残欠の可能 性もある。先端部に回転痕があり、 欠損品の再利用を想定し、ここ に分類した。

第10表 北貝塚出土骨角器一覧表(4)



挿図番号	登録番号	出土年月日	地点	新属名	旧属名	時期	器種名	分類	使用素材	長さ(cm)	(針先の長さ)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
112	16-007	2000.6.15	No.5G	NSM-155	16-140	縄文前期	刺突具	2類	鹿角	7.4	-	1.9	0.9	7.4	打割した鹿角片の一端を使用するもので、特に表面調整は無い。先端部に明瞭な回転痕がある。
113	16-411	2000.10.19	No.4G	NSM-277	16-242	縄文前期後葉	刺突具	2類	陸獣骨か	1.5	-	0.5	0.3	0.1	先端部だけの破片であり別な番種の可能性もある。先端部に回転痕あり。
114	15-003	1999.8.23	No.6G	NSM-075	15-073	縄文中期	刺突具	2類	陸獣骨(小型獣か)	4.1	-	1.0	0.9	1.0	獣骨片をそのまま使用する。先端部にだけ回転による使用痕がある。
115	17-255	2001.9.3	No.3G	NSM-285	17-251	縄文前期	刺突具	2類	マグロ類棘	6.2	-	0.7	0.3	1.1	マグロの棘の先端部に回転痕を有するもの。
116	16-101	2000.8.28	No.5G	NSM-131	16-117	縄文前期後葉	刺突具	2類	マグロ類棘	9.7	-	0.7	0.5	2.4	マグロの棘の先端部に回転痕を有するもの。
117	19-365	2003.9.11	No.2G	NSM-384	19-345	縄文前期	刺突具	2類	陸獣骨か	2.4	-	0.4	0.4	0.4	先端部付近の破片であり別な番種の可能性もある。断面形は円形。
118	16-146	2000.9.14	No.4G	NSM-224	16-207	縄文前期	刺突具	3類	鹿角(角尖部)	8.2	-	1.4	1.3	9.6	突削面が角先、下が角叉。基部上端は擦切り後に折取り。基部に沈線が巡り、先端部を細く尖らせるが先端を欠く。形態や製作技法が2A類約針に類似し、これの転用品の可能性が大きい。
119	16-181	2000.10.16	No.4G	NSM-272	16-239	縄文前期中葉	刺突具	3類	鯨骨	7.3	-	1.0	0.1	2.7	基部の上端は丁寧に研磨。基部に沈線が巡る。形態的には118・120に類似するが、2A類約針の転用品ではない。
120	16-267	2000.7.6	No.4G	NSM-183	16-168	縄文前期	刺突具	3類	鹿角(角尖部)	5.5	-	0.8	0.8	2.4	突削面が角先、下が角叉。基部上端は擦切り後に折取り。基部に沈線が巡り、先端部を細く尖らせるが先端を欠く。他のものよりやや小形。形態や製作技法が2A類約針に類似し、これの転用品の可能性が大きい。
121	16-114	2000.8.23	No.5G	NSM-101	15-098	縄文前期後葉	刺突具	1類	クマ腓骨近位～中間部	15.3	-	1.4	1.1	6.4	クマ腓骨の中間部を斜めに割り、近位部を基部とする。先端部付近に横方向の線痕がある。
122	18-299	2002.11.13	No.3G	NSM-343	18-303	縄文前期	刺突具	1類	大型の鳥骨	3.9	-	0.6	0.2	0.5	基部を欠く。現存部上端の断面は扁平で先端部にかけてゆるやかに尖る。垂飾品などの可能性もあり。
123	15-026	1999.10.4	No.4G～5G	NSM-107	15-101B	縄文前期後葉	刺突具	1類	鳥骨か	4.2	-	1.0	0.2	0.5	骨片の一端部を尖らせて使用したもの。
124	17-246	2001.9.27	No.3G	NSM-315・NSM-316・NSM-317	17-279・17-280・17-283	縄文前期	刺突具	1類	陸獣骨か	4.2	-	0.8	0.3	1.0	骨片の一端部を尖らせて使用したもの。断面全体に調整痕あり。
125	16-140	2000.9.8	No.4G	NSM-223	16-204	縄文前期	髪針(ヘアピン)	-	シカ中手・中足骨か	10.2	-	0.8	0.4	3.8	基部が瘤状に膨らみ上端に擦切り痕がある。基部と軸部の境界に沈線が巡る。先端部は尖るが回転痕はない。先端部付近は光沢がある。
126	15-019	1999.8.9	No.5G	NSM-054	15-061	縄文中期	飾	-	鹿角	4.5	-	2.8	0.4	4.7	上下を欠く。裏面の海綿体質部はほぼ完全に除去する。沈線と貫通孔による装飾があり、側縁には棘条の装飾がある。よく研磨され光沢がある。
127	16-039	2000.5.24	No.5G	NSM-127	16-110	縄文前期後葉	耳飾り	-	鹿角か	3.2	-	1.7	0.3	1.6	所謂球状耳飾りで、上端を丸く、下端を平らに作る。よく研磨され光沢がある。
128	15-011	1999.9.17	No.6G	NSM-093	15-089	縄文中期前葉	垂飾品類	1類	クヌギ下顎大歯(R)	2.2	-	0.6	0.4	0.5	所謂牙玉で歯根部に穿孔したものの。
129	17-287	2001.9.18	No.4G	NSM-305	17-269	縄文前期	垂飾品類	1類	オオカミ下顎第1大臼歯	3.6	-	1.6	1.1	2.5	全体のほぼ半分が現存。歯根部に穿孔した垂飾品で、欠損後の歯根部や欠損部のピッチが付着し、何らかの転用が図られる。
130	16-282	2000.11.15	No.6G	NSM-079	15-077	縄文前期	垂飾品類	1類	ホソジロザメ歯	2.1	-	2.1	0.5	1.0	歯根部に2カ所の穿孔あり。
131	15-039	1999.9.13	No.5G	NSM-076	15-074	縄文中期	垂飾品類	1類	ホソジロザメ歯	2.2	-	2.0	0.6	0.9	歯根部に2カ所の穿孔あり。
132	16-403	2000.8.10	No.5G	NSM-213	16-187	縄文前期	垂飾品類	2類	サメ類椎骨	2.2	-	2.1	1.1	2.2	椎体の中心部を穿孔する。両面ともに周縁が磨滅し、他のものと繋げて使用した可能性が大きい。
133	15-031	1999.8.19	No.3G	NSM-274	15-C25	縄文前期	垂飾品類	2類	鹿角	4.0	-	1.9	0.7	3.4	裏面の海綿体質部をほぼ除去し、上端に両面から穿孔する。
134	15-014	1999.6.28	No.5G	NSM-034	15-033	縄文中期	垂飾品類	2類	大型鳥骨	4.5	-	0.7	0.3	0.7	大型の鳥骨を擦切り札状にしたものの基部に穿孔し、先端部を尖らせるもの。
135	15-020	1999.6.4	No.5G	NSM-023	15-023	縄文中期	垂飾品類	2類	大型鳥骨	2.3	-	0.7	0.3	0.4	大型の鳥骨を擦切り札状にしたものの基部に穿孔し、先端部を尖らせるもの。丁寧に研磨され光沢がある。
136	17-272	2001.9.12	No.4G	NSM-297	17-263	縄文前期	髪針(ヘアピン)	-	鹿角か	2.6	-	0.7	0.3	0.3	平らな頭部を有し、軸部の断面形はほぼ楕円形。上端は擦切り後に折取る。丁寧に研磨される。

第11表 北貝塚出土骨角器一覧表(5)

押図 番号	登録 番号	出土 年月日	地点	新層名	旧層名	時 期	器種名	分 類	使用 素材	長さ (cm)	(針先の 長さ)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考
137	15-007	1999.7.26	No.6G	NSM-053	15-056	縄文中期	垂飾品類	3類	鹿角	2.8	-	2.4	0.6	3.9	上端は欠損が折取り痕。下端は欠損。鹿角の海綿体質部を除去し、現存部は中央の両面から削って穿孔する。
138	16-273	2000.6.13	No.5G	NSM-154	16-139	縄文前期後葉	垂飾品類	2類	二枚貝 (種不明)	0.5	-	0.5	0.2	0.1	貝製の平玉。
139	15-027	1999.6.25	No.4G	NSM-034	15-033	縄文中期	垂飾品類	3類	鹿角	5.0	-	2.1	0.4	6.1	海綿体質部を除去し板状に加工したもの。全面が丁寧に研磨される。未穿孔の垂飾品か。
140	16-283	2000.11.15	No.6G	NSM-079	15-077	縄文中期	垂飾品類	3類	鹿角	4.5	-	1.3	1.1	5.3	棒状の鹿角の両端が鈍く尖り、ほぼ中央に沈線を有する。
141	19-350	2003.6.2	No.3G	NSM-357	19-317	縄文前期	腕輪	-	ペンケイ ガイ (R)	7.0	-	0.9	0.4	3.2	ペンケイガイの右殻を使用する。腹縁と内側を研磨するが、内側は使用痕の可能性もある。
142	15-034	1999.7.27	No.3G	NSM-266	15-C20	縄文前期	腕輪	-	イノシシ の下顎犬 歯 (L)	6.9	-	1.4	0.9	3.8	下顎犬歯を裁断し舌側を使用。比較的若い個体で、上端に咬合面を残し、下端は歯根部。未穿孔の腕輪と思われる。
143	15-023	1999.9.24	No.5G	NSM-095	15-092	縄文中期	指輪状 製品	-	鹿角	1.5	-	2.2	0.4	2.7	鹿角を輪切りにしたものの一端に突起状の装飾あり(欠損)。指貫か指輪状を呈する。
144	17-253	2001.9.12	No.3G	NSM-297	17-263	縄文前期	札状製 品	-	大型の鳥 骨	6.8	-	0.9	0.1	1.2	大型の鳥の管状骨を使用し、上下両端を擦切った後に裁断する。側縁に擦痕あり。管状製品の再加工した可能性もある。
145	16-041	2000.6.21	No.5G	NSM-162	16-145B	縄文前期	鯨骨製 品	-	鯨骨	4.8	-	5.0	1.5	30.3	現存部はほぼ円形で、中心に両面からの貫通孔があり、両面とも周縁に連続した小孔が連続する。欠損部には横位の沈線を施す。側縁にも沈線が巡る。骨刀などの柄頭を飾る環頭の装飾。
146	15-009	1999.8.20・ 1999.8.23	No.5G No.6G	NSM-069・ NSM-075	15-071・ 15-073	縄文中期	鯨骨製 品	-	鯨骨	12.9	-	2.1	0.9	14.8	骨刀などの柄の破片。上端はやや膨らむが柄頭の装飾を欠く可能性がある。下端には沈線を伴う棘条の装飾があり、柄の境界となる。
147	15-001	1999.6.9	No.7G	NSM-057	15-6A	縄文前期	加工痕 のある 素材	-	鯨骨	19.4	-	4.0	2.4	77.5	欠損した鯨骨の一部に擦痕等を有する。
148	16-408	2000.9.21	No.4G	NSM-238	16-217	縄文前期	加工痕 のある 素材	1類	鹿角	1.7	-	1.1	1.0	2.0	棒状の鹿角を擦切り、折取ったもの。上端は折取り後に研磨されるので、装飾品類等の欠損品の可能性もある。
149	16-075	2000.5.22	No.6G	NSM-124	16-108	縄文前期後葉	加工痕 のある 素材	1類	イノシシ 群骨 (R か)	2.2	-	1.2	0.6	1.0	上下両端ともに擦切り後に折取る。
150	16-164	2000.10.10	No.4G	NSM-261	16-230	縄文前期中葉	加工痕 のある 素材	1類	鹿角	3.2	-	0.8	0.8	1.4	棒状の鹿角を擦切り後に折取る。
151	16-306	2000.7.25	No.4G	NSM-190	16-172	縄文前期	加工痕 のある 素材	1類	鹿角	0.4	-	0.7	0.7	0.6	棒状の鹿角を擦切り後に折取る。
152	16-145	2000.9.14	No.4G	NSM-222	16-206	縄文前期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	5.6	-	2.0	1.0	7.1	板状の鹿角を「し」字形に加工途中のもの。釣針の未製品と思われる。輪部断面はほぼ円形に加工される。
153	16-168	2000.9.21	No.4G	NSM-238	16-217	縄文前期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	6.5	-	1.7	0.7	6.8	上下両端を打ち割り・擦切り、板状にした鹿角(角幹)の中央を擦切り途中のもの。釣針等の未製品。
154	15-015	1999.6.11	No.5G	NSM-025	15-025	縄文中期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	4.8	-	2.4	1.2	9.5	上下両端を打ち割り、板状にした鹿角(角幹)。裏面には加工痕なし。
155	19-340	2003.5.27	No.3G	NSM-353	19-313	縄文前期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	7.6	-	2.5	0.9	9.5	上下両端を打ち割り、板状にした鹿角(角幹)。裏面には加工痕なし。
156	19-386	2003.9.1	No.3G	NSM-380	19-341	縄文前期前葉	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	7.5	-	2.2	1.1	9.1	上下両端を打ち割り、板状にした鹿角(角幹)。裏面には加工痕なし。
157	19-382	2003.8.25	No.2G	NSM-377	19-337	縄文前期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	6.7	-	2.8	1.0	8.1	上下両端を打ち割り、板状にした鹿角(角幹)。裏面には加工痕なし。
158	16-024	2000.6.7	No.5G	NSM-146	16-131	縄文前期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	6.1	-	1.7	1.1	5.5	上下両端を打ち割り、板状にした鹿角(角幹)。裏面には加工痕なし。
159	16-406	2000.9.18	No.4G	NSM-229	16-211	縄文前期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	4.9	-	2.2	0.9	6.1	上下両端を打ち割り、板状にした鹿角(角幹)。裏面には加工痕なし。
160	19-375	2003.9.11	No.4G	NSM-384	19-345	縄文前期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	4.7	-	2.3	0.7	4.0	上下両端を打ち割り、板状にした鹿角(角幹)。裏面には加工痕なし。
161	19-389	2003.8.20	No.3G	NSM-375	19-333	縄文前期前葉	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	8.1	-	2.6	1.1	10.3	上下両端を打ち割り、板状にした鹿角(角幹)。裏面には加工痕なし。

第12表 北貝塚出土骨角器一覧表(6)



押図 番号	登録 番号	出土 年月日	地点	新層名	旧層名	時 期	器種名	分 類	使用 素材	長さ (cm)	(針先の 長さ)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考
162	15-012	1999.9.17	No.6G	NSM-093	15-089	縄文中 期前葉	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	6.4	—	1.3	0.7	3.6	上下両端を打ち割り、板状にした 鹿角(角幹)。表面に擦痕あり。裏 面には加工痕なし。
163	16-030	2000.6.27	No.4G	NSM-168	16-153	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	4.9	—	1.6	0.8	3.8	上下両端を打ち割り、両側縁を擦 切り板状にした鹿角(角幹)。裏 面は海綿体質部を除去するも不 完全。
164	16-096	2000.7.7	No.4G	NSM-185	16-170	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	3.0	—	1.9	0.9	3.6	上下両端を打ち割り、板状にした 鹿角(角幹)。裏面には加工痕な し。
165	16-008	2000.6.15	No.5G	NSM-155	16-140	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	5.7	—	1.3	0.7	3.2	擦痕を有する板状の鹿角。
166	16-206B	2000.9.25	No.4G	NSM-251	16-220	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角	7.7	—	1.3	0.4	3.7	両面に擦痕を有する板状の鹿角。
167	19-391	2003.8.20	No.3G	NSM-375	19-333	縄文前 期前葉	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(角 尖部)	7.4	—	2.0	1.5	12.4	打割により角又より切り離され た角枝。
168	16-124	2000.8.9	No.5G	NSM-033	15-031B	縄文中 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(角 尖部)	6.0	—	1.6	1.4	10.4	打割により角又より切り離され た角枝。擦痕あり。
169	19-374	2003.8.26	No.2G	NSM-376	19-338	縄文中 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(角 尖部)	3.0	—	1.3	1.1	2.5	打割により角又より切り離され た角枝。
170	19-380	2003.9.9	No.4G	NSM-382	19-343	縄文前 期前葉	加工痕 のある 素材	2類	陸獣骨	7.1	—	1.6	0.7	4.5	剥離痕を伴う骨片にピッチが付 着したもの。
171	16-301	2000.7.4	No.4G	NSM-182	16-165	縄文前 期	加工痕 のある 素材	2類	イノシシ 腓骨	2.6	—	1.0	0.3	0.3	折取り痕あり。
172	15-308	1999.7.26	No.6G	NSM-053	15-056	縄文中 期	加工痕 のある 素材	1類	イノシシ 腓骨	3.2	—	0.6	0.4	0.6	上端部を折取った後に研磨する。 未製品か。
173	16-005	2000.5.23	No.6G	NSM-125	16-109	縄文前 期	加工痕 のある 素材	1類	鹿角	5.4	—	1.1	0.5	1.9	前面に擦痕あり。釣針などの擦 り切れて除去された部分か。
174	18-397	2002.11.11	No.3G	NSM-343	18-303	縄文前 期	加工痕 のある 素材	2類	イノシシ の顎下 犬歯(L)	8.5	—	2.9	0.4	7.8	かなり大型の下顎犬歯を擦り切 った舌側が残存。上端に咬合面を 残す。
175	15-310	1999.9.13	No.6G	NSM-078	15-076	縄文中 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(L)	51.9	—	1.1	3.3	692.2	かなり大型の鹿角の第1枝・第2 枝・第4枝を打ち割り除去。第3 枝を残す。角座骨も打ち割る。
176	17-400	2001.7.4	No.5G	NSM-283	17-249	縄文前 期後葉	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(R) 角座付 近	14.4	—	5.9	7.1	193.2	角幹と角枝を打ち割り除去。角 座骨も打ち割る。
177	17-254	2001.9.27	No.3G	NSM-316	17-280	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(R) 角座付 近	11.3	—	6.2	4.9	94.5	落角の角幹と角枝を打ち割り除 去。
178	18-398	2002.11.14	No.2G	NSM-346	18-307	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(L) 角座付 近	8.7	—	7.2	4.2	65.6	落角の角幹と角枝を打ち割り除 去。
179	16-172	2000.9.27	No.4G	NSM-253	16-222	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(R) 第2叉 付近	7.3	—	4.5	2.7	57.0	角幹と角枝を打ち割り除去。
180	19-392	2003.8.20	No.3G	NSM-375	19-333	縄文前 期前葉	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(R) 第2叉 付近	13.2	—	5.7	3.2	54.7	角幹を打ち割り除去。第2枝を残 す。
181	16-289	2000.9.26	No.4G～5G 境界付 近	NSM-252	16-221	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(R) 第3叉 付近	11.3	—	7.6	2.7	44.4	角幹と第4枝を打ち割り除去。第 3枝を残す。
182	15-040	1999.9.30	No.5G～6G	NSM-101	15-098	縄文前 期後葉	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(L) 角座付 近	16.6	—	6.3	0.5	47.9	角座と角幹を打ち割り除去。第1 枝を残す。裏面は加工痕なし。
183	16-142	2000.9.8・ 2000.9.7	No.4G	NSM-207・ NSM-223	16- 195・16- 204	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(L) 第3叉 付近	17.5	—	12.4	2.3	89.8	角幹を打ち割り除去。第3枝・第4 枝を残す。
184	17-237	2001.10.2	No.3G	NSM-317	17-283	縄文前 期	加工痕 のある 素材	3類	鹿角(L) 角座付 近	27.5	—	7.7	6.3	299.2	角幹と第1枝を擦り、角座骨を 打ち割る。加工後に全面的な磨 減あり。磨減は自然の営為か。

※時期区分は概ね、縄文前期前葉⇒大木1式以前～大木2式相当期、縄文前期中葉⇒大木3式～大木4式相当期、縄文前期後葉⇒大木5式～大木6式相当期、縄文中期前葉⇒大木7式、縄文中期中葉⇒大木8式とした

第13表 北貝塚出土骨角器一覧表(7)

## IV 調査のまとめ

第IV期内容確認調査にて北貝塚から出土した骨角器の概要は前述したとおりである。現時点では土器・石器・動物遺存体などの伴出遺物の整理作業が未了であり、考察を加えることが不可能なので、資料整理や報告書作成過程で確認された事項や問題点などを抽出することでまとめとした。

1 銚頭については、今回の発掘調査例が岩手県内にも縄文前期に伴う開窩式銚頭が確実に存在することを示す結果となった。この銚頭はオットセイやアシカなどの海獣類の捕獲を主な目的として製作されたものと想定され、実際これらの遺存体も調査時には比較的目についた。

崎山貝塚の銚頭に類似する例としては、青森県八戸市一王寺貝塚の銚頭（金子・忍沢1986ほか）があげられ、この方面から伝播したものの可能性が大きい。但し、一王寺の例は尾部が単尾のものを含むなど、崎山貝塚に比較して多様性がある。

2 釣針については、今回出土した骨角器の中で最も出土量が多く、当時の崎山貝塚における生業の中で釣漁業が重要な位置を占めていたことがうかがえる。

この中でも2A類釣針については、大形の製品が多く角尖部を素材として製作された点などから他の単式釣針とは明瞭に区別できる。また、2B類釣針は2A類から変遷した形態と想定された。これらの類例としては、やはり青森県八戸市内の遺跡等からの発見例（音喜多1968）と北海道函館市戸井貝塚の発掘調査例（西本ほか1993）がある。特に戸井貝塚の例では軸部や針先部などに赤色や黒色の付着物が螺旋形に残存しており、崎山貝塚でもこれに類似する状況が確認できた。この付着物は釣針に魚皮や鳥の羽などを巻き付けた際の痕跡と思われ、戸井貝塚の先行調査例と併せて縄文時代前期以降の北日本において疑似針として使用された可能性の大きい釣針が存在することを指摘できた。

3 刺突具類については、釣針に次いで出土量が多く特に2類・3類とした回転痕を有するものが特徴的であった。一般にこれらの刺突具は錐やドリルとして皮革や布等へ穿孔する使用法が想定される。

しかし、3類は基部に紐を結ぶための沈線を施すことから、縄の撚り目や結び目などをこじ開けて紐を通すような使用法が想定され、例えば魚網や縄など漁具の製作や補修に関するものであった可能性が大きい。また、3類刺突具に類似する基部形態の3類へラに対しても通常の角べらとしての使用法は想定し難いので、魚網の製作用などの漁業に関する骨角器だった可能性を指摘しておきたい。

4 装身具類については、髪針・櫛・耳飾り・垂飾品類・腕輪・指輪状製品等と人体の各部を装飾する器種が出揃っており、崎山貝塚の地域的・時期的な特徴が反映されたものとなっている。

これらの中で、櫛についてはX字形の文様意匠や円孔を多用する装飾方法など、青森県二ツ森貝塚の出土例（甲野1964ほか）との類似性が認められるものである。

鹿角製耳飾りについては石製の玦状耳飾りと全く同様な形態を有するものであるが、全国的にも類例の少ないものであろうと思われる。

指輪状製品とした資料は指輪や指貫に形態が類似することで呼称したものであるが、大分県川原田洞穴から同様な製品が出土しており、芹沢長介はこれを玦状耳飾りの一類型として捉えている(芹沢1965)。また、茨城県興津貝塚からも同様な製品が出土しているが、環状垂飾品として分類されている(金子・忍沢1986)。

垂飾品類の中で特筆されるのは、オオカミの大白歯を使用したもので、かなり大型の成獣から得られたものと想定される。当初は歯根部に穿孔して垂飾品として使用したものであったが、欠損(あるいは意図的だった可能性もある)後に他の対象物に接着させて使用したものと思われピッチの付着が確認される。

これらの資料以外に注目されるのは鯨骨を素材とする骨角器である。縄文時代の鯨骨製骨角器については骨刀などのほかに肋骨を板状に加工したものなどがあり、縄文前期などの比較的古い時期の資料は北日本を中心に分布していることが知られている。崎山貝塚の例はいずれも欠損品であり詳述はできないが、骨刀など棒状の形態を有する製品の柄頭や柄の破片だと想定される。特に柄頭の破片については環頭状を呈する精巧なものであり特筆される。

## 参考文献

- 音喜多富寿 1968 「骨角製釣針の一般的形式と「鹿角製長軸棒状釣針」の対比」『うとう』第七拾号 青森郷土会
- 金子浩昌・忍沢成視 1986 『骨角器の研究 縄文篇Ⅰ・Ⅱ』考古民俗叢書22・23 慶友社
- 熊谷常正ほか 2003 「三陸地方の貝塚と骨角器」『考古学ジャーナル』No.506 ニューサイエンス社
- 小井川和夫ほか 1985 『里浜貝塚Ⅳ—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅳ—』東北歴史資料館資料集13 東北歴史資料館
- 甲野勇ほか 1964 『日本原始美術2 土偶・装身具』講談社
- 新庄屋元晴ほか 1986 『田柄貝塚Ⅲ 骨角牙貝製品・自然遺物編』宮城県文化財調査報告書第111集 宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局
- 芹沢長介 1965 「IV縄文時代の研究をめぐる諸問題 1 周辺文化との関連」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社
- 高橋憲太郎・鎌田祐二 2007 「三陸沿岸の釣漁」『縄文時代の考古学5 なりわい 食糧生産の技術』同成社
- 西本豊弘ほか 1993 『戸井貝塚Ⅲ 縄文時代後期初頭の貝塚の発掘調査報告書』北海道亀田郡戸井町教育委員会
- 村越潔 1971 『円筒土器文化』雄山閣考古学選書10 雄山閣
- 八幡一郎ほか 1959 『世界考古学大系第1巻 先縄文・縄文時代』平凡社



# 写真図版

Plates







崎山貝塚周辺海岸線航空写真（1987）



崎山地区航空写真（1986）





崎山貝塚垂直写真 (1998)



崎山貝塚垂直写真 (2008)





崎山貝塚航空写真 (1986)



崎山貝塚航空写真 (1995)



崎山貝塚航空写真 (2000)





北貝塚調査区全景 (1999)



北貝塚調査区遺物出土状況 (1995)



北貝塚調査区全景 (2003)



北貝塚調査区中掘火山灰検出状況 (2003)





No.5G、NSM-181 層骨角器 (145) 等出土状況 (2004)



No.5G、NSM-181 層骨角器 (001) 等出土状況 (2004)





No.4G、NSM-034 層骨角器 (139) 出土状況 (1999)



No.6G、NSM-053 層骨角器 (137) 出土状況 (1999)



No.6G、NSM-060 層骨角器 (034) 出土状況 (1999)





No.5G、NSM-054 層骨角器 (126) 出土状況 (1999)



No.6G、NSM-070 層骨角器 (086) 出土状況 (1999)



No.6G、NSM-070 層骨角器 (086) 出土状況 (1999)  
(上は NSM-078 層出土骨角器 (175))



PL.08



No.6G、NSM-075 層骨角器 (146) 出土状況 (1999)



No.5 ~ 6G、NSM-151 層骨角器 (083) 出土状況 (2000)



No.5G、NSM-155 層骨角器 (002) 出土状況 (2000)





No.5G、NSM-155 層骨角器 (054) 出土状況 (2000)



No.4G、NSM-206 層骨角器 (014) 出土状況 (2000)



No.4G、NSM-224 層骨角器 (118) 出土状況 (2000)



PL.10



No.3G、NSM-236 層骨角器 (066) 出土狀況 (1999)



No.4G、NSM-248 層骨角器 (103) 出土狀況 (2000)



No.5G、NSM-263 層骨角器 (119) 出土狀況 (2000)





No.4G、NSM-263 層骨角器 (015) 出土状況 (2000)



No.4G、NSM-271 層骨角器 (068) 出土状況 (2000)



No.3G、NSM-323 層骨角器 (088) 出土状況 (2001)



PL.12



No.4 ~ 5G、NSM-034 層縄文土器出土状況 (1999)



No.5G、NSM-152 層人骨 (尺骨) 出土状況 (2000)



No.4G、NSM-258 層シカ下顎骨出土状況 (1999)





No.3G、NSM-352層アシカ下顎骨出土状況 (2003)



No.4～5G、NSM-207層オットセイ下顎骨出土状況 (2000)



No.5～6G、NSM-026層カツオ椎骨出土状況 (1999)





調査区設定 (2000)



粗掘り (1999)



クリーニング作業 (1999)



調査参加者 (2000)



実測作業 (2000)



調査指導 (1999)



現地説明会 (1999)



現地説明会 (2000)

北貝塚調査状況スナップ





001 (No.5G・NSM-162層)



002 (No.5G・NSM-155層)



003 (No.5G・NSM-283層)



006 (No.2G・NSM-370層)



004 (No.5G・NSM-164層)  
(NSM-179層・NSM-186層)



005 (No.5G・NSM-208層)



007 (No.3G・NSM-274層)



008 (No.6G・NSM-035層)



009 (No.5G・NSM-029層)



010 (No.4G・NSM-270層)



011 (No.4G・NSM-202層)



012 (No.4G・NSM-257層)



013 (No.5G・NSM-136層)



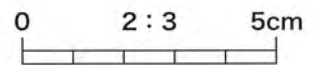
014 (No.4G・NSM-207層)



015 (No.4G・NSM-272層)



016 (No.4G・NSM-177層)



北貝塚出土骨角器 (1)

PL.16



北貝塚出土骨角器 (2)



038 (No.5G・NSM-194層)



039 (No.4G・NSM-159層)



040 (No.6G・NSM-137層)



041 (No.3G・NSM-343層)



042 (No.4G・NSM-172層)



043 (No.3G・NSM-375層)



044 (No.4G・NSM-112層)



045 (No.5G・NSM-098層)



046 (No.3G・NSM-232層)



047 (No.4G・NSM-226層)



048 (No.3G・NSM-351層)



049 (No.3G・NSM-350層)



050 (No.3G・NSM-367層)



051 (No.4G・NSM-159層)



052 (No.4G・NSM-185層)



053 (No.6G・NSM-067層)



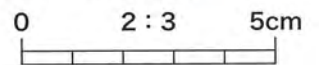
054 (No.5G・NSM-155層)



055 (No.5G・NSM-156層)



056 (No.3G・NSM-380層)



北貝塚出土骨角器 (3)



PL.18



057 (No.5G~6G境界付近)  
NSM-137層



058 (No.5G・NSM-126層)



059 (No.4G・NSM-387層)



060 (No.4G・NSM-277層)



061 (No.5G~6G境界付近・NSM-053層)



062 (No.4G・NSM-183層)



063 (No.5G・NSM-184層)



064 (No.4G・NSM-220層)



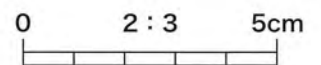
065 (No.4G・NSM-275層)



066 (No.3G・NSM-236層)



067 (No.2G~3G境界付近・NSM-344層)



北貝塚出土骨角器 (4)



068(No.4G・NSM-279層)



069(No.5G・NSM-023層)



070(No.3G・NSM-298層)



071(No.4G・NSM-110層)



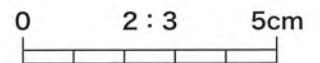
073(No.3G・NSM-370層)



074(No.3G・NSM-326層)



072(No.3G・NSM-326層)



北貝塚出土骨角器 (5)



PL.20



075(No.3G・NSM-351層)



077(No.5G・NSM-179層)



079(No.5G・NSM-269層)



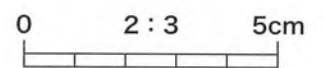
076(No.3G・NSM-375層)



078(No.5G・NSM-144層)



080(No.5G・NSM-269層)



北貝塚出土骨角器 (6)



081 (No.4G・NSM-282層)



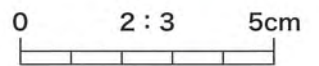
082 (No.5G・NSM-131層)



083 (No.5G~6G境界・NSM-151層)



084 (No.4G・NSM-173層)



北貝塚出土骨角器 (7)

PL.22



085 (No.4G~5G境界)  
(NSM-225層)



086 (No.6G・NSM-070層)



087 (No.4G・NSM-238層)



088 (No.3G・NSM-325層)



089 (No.3G・NSM-322層)



090 (No.6G・NSM-094層)



092 (No.5G・NSM-085層)



091 (No.4G~5G・NSM-136層)



096 (No.5G・NSM-269層)



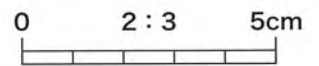
093 (No.2G・NSM-369層)



094 (No.2G~3G境界付近)  
(NSM-350層)



095 (No.5G・NSM-282層)



北貝塚出土骨角器 (8)





097 (No.3G・NSM-268層)



098 (No.5G・NSM-218層)



099 (No.5G・NSM-155層)



100 (No.5G・NSM-156層)



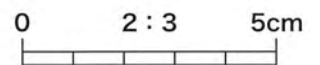
101 (No.6G・NSM-128層)



102 (No.4G・NSM-270層)



103 (No.4G・NSM-258層)



北貝塚出土骨角器 (9)

PL.24



104(No.4G・NSM-270層)



105(No.2G・NSM-357層)



106(No.6G・NSM-061層)



107(No.4G・NSM-297層)



108(No.3G・NSM-241層)



109(No.4G・NSM-254層)



110(No.5G・NSM-084層)



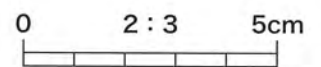
111(No.4G・NSM-168層)



112(No.5G・NSM-155層)



113(No.4G・NSM-277層)



北貝塚出土骨角器 (10)





114(No.6G・NSM-075層)



115(No.3G・NSM-285層)



116(No.5G・NSM-131層)



117(No.2G・NSM-384層)



118(No.4G・NSM-224層)



119(No.4G・NSM-272層)



120(No.4G・NSM-183層)



121(No.5G・NSM-101層)



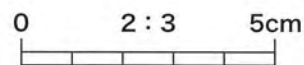
122(No.3G・NSM-343層)



123(No.4G~5G・  
NSM-107層)



124(No.3G・NSM-315層)  
(NSM-316層・NSM-317層)



北貝塚出土骨角器 (11)

PL.26



125 (No.4G・NSM-223層)



126 (No.5G・NSM-054層)



127 (No.5G・NSM-127層)



128 (No.6G・NSM-093層)



129 (No.4G・NSM-305層)



130 (No.6G・NSM-079層)

131 (No.5G・NSM-076層)



132 (No.5G・NSM-213層)



133 (No.3G・NSM-274層)



134 (No.5G・NSM-034層)



135 (No.5G・NSM-023層)



136 (No.4G・NSM-297層)



137 (No.6G・NSM-053層)



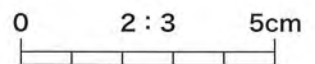
139 (No.4G・NSM-034層)



140 (No.6G・NSM-079層)



138 (No.5G・NSM-154層)



北貝塚出土骨角器 (12)





141 (No.3G・NSM-357層)



144 (No.3G・NSM-297層)



143 (No.5G・NSM-095層)

142 (No.3G・NSM-266層)



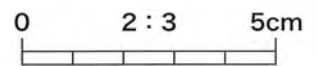
145 (No.5G・NSM-162層)



146 (No.5G・NSM-069層)  
(No.6G・NSM-075層)



147 (No.7G・NSM-057層)



北貝塚出土骨角器 (13)

PL.28



148 (No.4G・NSM-238層)



149 (No.6G・NSM-124層)



150 (No.4G・NSM-261層)



151 (No.4G・NSM-190層)



152 (No.4G・NSM-222層)



153 (No.4G・NSM-238層)



154 (No.5G・NSM-025層)



155 (No.3G・NSM-353層)



156 (No.3G・NSM-380層)



157 (No.2G・NSM-377層)



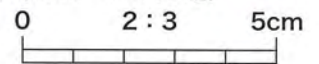
158 (No.5G・NSM-146層)



159 (No.4G・NSM-229層)



160 (No.4G・NSM-384層)



北貝塚出土骨角器 (14)





161 (No.3G・NSM-375層)



162 (No.6G・NSM-093層)



163 (No.4G・NSM-168層)



164 (No.4G・NSM-185層)



165 (No.5G・NSM-155層)



166 (No.4G・NSM-251層)



167 (No.3G・NSM-375層)



168 (No.5G・NSM-033層)



169 (No.2G・NSM-376層)



170 (No.4G・NSM-382層)



171 (No.4G・NSM-182層)



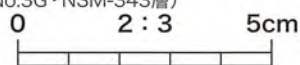
172 (No.6G・NSM-053層)



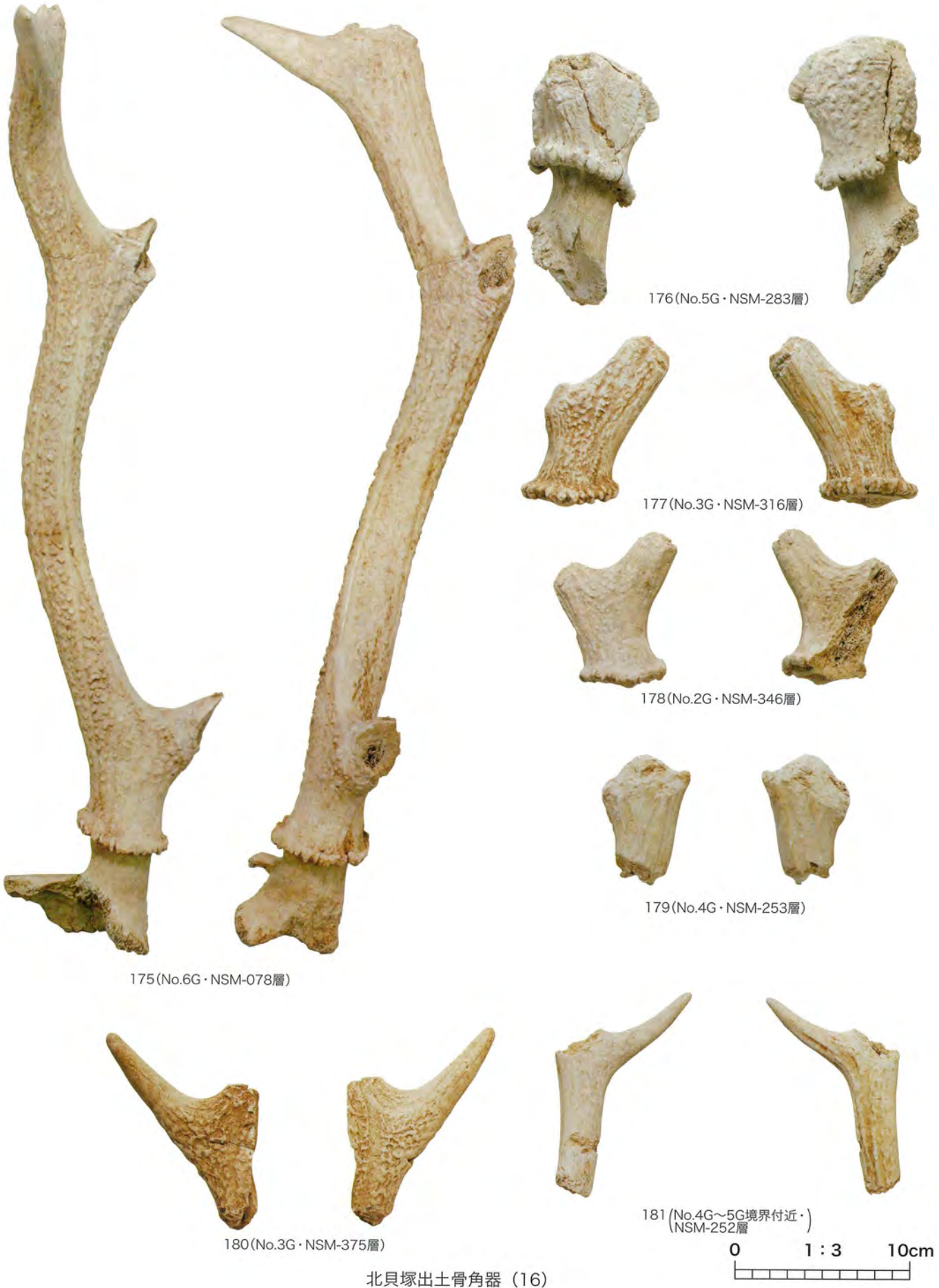
173 (No.6G・NSM-125層)



174 (No.3G・NSM-343層)



北貝塚出土骨角器 (15)



北貝塚出土骨角器 (16)





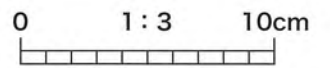
182 (No.5G~6G・NSM-101層)



183 (No.4G・NSM-207層)  
(No.4G・NSM-223層)



184 (No.3G・NSM-317層)



北貝塚出土骨角器 (17)

## 報告書抄録

ふりがな	くにしていしせきさきやまかいづか
書名	国指定史跡崎山貝塚
副書名	第IV期内容確認調査概報(骨角器篇)
巻次	
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	No. 76
編著者名	高橋憲太郎
編集機関	宮古市教育委員会
所在地	〒028-2101 岩手県宮古市茂市2-112-1 TEL.0193-72-2175 FAX.0193-72-2176
発行年月日	平成21(2009)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さきやまかいづか 崎山貝塚	いわてけんみやこしさきやま 岩手県宮古市崎山 だい2ちわりあざみちのした 第2地割字道ノ下52番1	—	LG14-2079	39° 40' 21"	141° 57' 48"	平成10年度~ 平成15年度	調査区 135 完掘 45	史跡内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
崎山貝塚	集落・貝塚	縄文前～中期	貝塚	骨角器(銚頭・ヤス・釣針・ヘラ・リタッ チャー・骨針・刺突具・髪針・櫛・耳飾り・ 垂飾品・腕輪・指輪状製品・札状製品・加 工痕のある素材)	1 縄文前期の開高式銚頭 が岩手県にも存在するこ とを確認できた。  2 釣針の製作技法につい ての知見が得られるとと もに、疑似針と思われる 釣針の存在を指摘でき た。  3 刺突具やヘラの中に漁 業と関わりのある可能性 を有するものが含まれる 可能性を指摘できた。



---

宮古市埋蔵文化財調査報告書 76

## 国指定史跡崎山貝塚

第IV期内容確認調査概報（骨角器篇）

---

平成 21 (2009) 年 3 月 25 日 印刷

平成 21 (2009) 年 3 月 31 日 発行

表紙・内表紙題字 佐竹松濤氏揮毫

発行 岩手県宮古市教育委員会  
〒028-2101 宮古市茂市第2地割112番地1  
TEL 0193-72-2175

印刷 株式会社 文化印刷  
〒027-0037 岩手県宮古市松山5-13-6  
TEL 0193-62-4578

---







